

東頭位で、次いで西頭位で、そして最後に東頭位で埋葬されたと考えられている(渡辺 1965)。一方で、西頭位が東頭位に先んじて埋葬されたことを示す例もみられる。例えば、久米三成4号墳の第1主体部は東西に長軸をもち、西頭位である1号人骨の脛骨の上に東頭位である2号人骨の腰骨が重なっていた(河本他 1979)。他に、沼6号墳で検出された箱形石棺の場合もまた西頭位の埋葬が行われたようだ(今井他 1969)⁽¹²⁾。東頭位が原則で、同棺に対置で合葬された場合には必然的に西頭位となる。西頭位が対置埋葬の単なる結果的産物ではなかったならば単独埋葬の場合でも一定の現れ方をしたはずであるが、西頭位であったことが確実な単独埋葬はきわめて少ない。

小形墳の場合には東ないし東南の頭位が多数派であったことを認めた上で注意されるのは、北頭位も混在する点である。横見墳墓群のように墳丘を越えた場合もあるが、両者が同一墳丘上で並存した場合には日上天王山古墳のように埋葬施設の長軸が直交するという事態が生じる。そこで、頭位を推定できない事例も含めて、この埋葬施設の直交という点についてみてみよう。

日上天王山古墳にきわめて類似した例として、岡山市に所在する一宮天神山2号墳があげられる(鎌木他 1986)。この古墳は前方部を南に向けた墳長が60mを越える前方後円墳で、後円部上にまず墳丘主軸に平行してA主体が、そのすぐ北側にはA主体に直交してB主体が設けられていた。A主体は南北口よりも北小口がやや幅広く、おそらく北頭位であったと思われる。つまり、B主体は前方部とは反対側に、すなわちA主体の頭部側に設けられたことになり、この点は日上天王山古墳とは異なる。小形の方墳である般山9号墳の場合も、南北に長軸をもち北頭位の埋葬が行われた第1主体部の北側に、これに直交する形で箱形石棺が検出された(平井他 1982)。箱形石棺からは、東頭位の人骨が検出された。一方、日上天王山古墳に近在する日上戻山1号墳では、長軸を東西にもつ竪穴式石槨の西側小口に接するように箱形石棺が直交して配されていた。箱形石棺からは、北頭位の人骨が検出された。

埋葬施設の長軸直交は、後円部上だけではなく後円部と前方部との間にも見出せる。例えば、七つ塚1号墳では後方部上に墳丘主軸に平行して2基の竪穴式石槨が、前方部上には墳丘主軸に直交して、すなわち後方部上の竪穴式石槨に直交して小形の竪穴式石槨が設けられていた。この前方部上の中形竪穴式石槨は平坦面のあり方からして、墳丘主軸に平行させて設けることが物理的に不可能であったわけではない⁽¹³⁾。また、墳丘上で5基の埋葬施設が検出された茶山1号墳の場合は、中心主体、第4主体、第5主体の計3基が墳丘主軸と同様に東西に長軸をもっていた(保田 1989)。一方、くびれ部付近で検出された第2主体と第3主体の長軸は、これらに直交して南北であった。茶山1号墳は墳頂部の平坦面がかなり狭い小形の前方後円墳であり、限られた空閑地の中でなされた長軸直交には何らかの意味が込められていたとみなければならないであろう。

墳丘併葬が行われたこと、そして各々に認められる較差は中心埋葬者と併葬者の関係の現れとみなされ、同時に世襲化傾向を強めつつあった首長権的一面を窺わせるものである(近藤 1983)。ここで問題とされている同一墳丘上における長軸直交を、このような観点から理解することも一考である。中心埋葬者と併葬者の関係の具体的な内容については予断を許さないが、選別意識が働いた結果ではないかと仮定して、次に弥生時代の後期段階における状況をみてみよう。

吉備における弥生墳丘墓の埋葬施設は、長軸が東西を指向する一群と南北を指向する一群が存在し、量的にみても墳丘規模からみても基本的に東西優位であったことが指摘されている(北條 1987:p106)。櫛築墓の中心主体(近藤他 1992)は東南一西北に長軸をもち、他に黒宮大塚墓の竪穴式石槨(間堀他 1977)、鈴物師谷1号墓の竪穴式石槨(春成他 1969)、女男岩墓(間堀他 1974)などが東西方向を指向

する。楯築墓の中心主体は複数の歯及び遺物の出土状態から、女男岩墓は人骨の検出状況からみて頭部が東側に置かれたことは間違いない。一方、南北を指向する例としては新本立坂墓の第2、第3主体(近藤他 1996a)、金敷寺裏山墓の竪穴式石槨(間壁他 1968)などがあげられ、後者の場合は人骨の検出状況からみて北頭位であったことがわかる。また、伊与部山墓では、東北東—西南西に長軸をもつ大形石槨及び東北—西南に長軸をもつ小形石槨各1が検出されているほか、南北主軸も一定数がみられる点は注意される(近藤他 1996b)。前方後円墳の定義と密接な関わりをもつ宮山(高橋他 1986)、矢藤治山(近藤他 1995)の両墳墓では、中心埋葬である竪穴式石槨の長軸方向が墳丘主軸に一致しており、前者では東西に後者では南北に長軸をもち頭位は各々東頭位、北頭位であったと推測される。このようにみると、弥生時代後期においても前方後円墳時代前期の中小墳と同様に、おそらく東頭位優勢の中で北頭位も混在するという状況にあったのではないかと推察される。

さらに、同一墳丘上で複数の埋葬施設が長軸を直交させて、あるいはこれに近い形で検出された事例も少なくない。岡山市の雲山鳥打弥生墳丘墓は東西に長い長方形を呈し、三者三様の埋葬施設が検出された(近藤 1986c)。第1主体と第3主体は長軸を墳丘主軸に平行させて、また第2主体はこれらに直交させて、すなわち長軸方向を南北にして設けられていた。楯築弥生墳丘墓では、第2主体として北北東—南南西に長軸をもつ木棺直葬の存在も確認されており、その頭位は東南頭位の中心主体とは大きく異なる。やはり、頭位に対する意識は埋葬空間を共有する意識とは別次元のものであったようだ。そして、同一墳丘上においても東西優位は顕著に現れている。例えば、12基の埋葬施設が確認された都月坂2号墓では、中心埋葬である竪穴式石槨は東北東—西南西に長軸をもち8基がこれに並行して設けられていたのに対し、直交するものが3基と前者が全体の四分の三を占めていた(近藤 1986d)。一方で、新本立坂墓では中心埋葬とおぼしき第3主体が南北に長軸をもち、全体でみると南北長軸と東西長軸が各5と拮抗していた点が注目される。さらに、津市市の才ノ峯長方形台状墓では7基の木棺墓のうち2号、3号、5号、6号木棺墓が長軸を東西に、1号、7号、8号木棺墓が南北にもっており(中山 1988)、同一墳丘上における長軸直交は少なくとも弥生時代後期前葉まで遡れるようである。

では、明確な墳丘を伴わない集団墓地の場合は如何であろうか。美作西部の落合町に所在する中山遺跡A調査区では198基の土坑墓が検出され、これらの一部は特殊器台や特殊壺を伴出したことから吉備南部との密接な関係が窺える(山磨他 1978)。A調査区の第3区画及び第4区画で検出された計29基の土坑墓の長軸は尾根筋に直交するものと平行するものとに二分される。斜交及び不明各1を除くと、直交する一群すなわち長軸が東南—西北の土坑墓は16基、平行する一群すなわち長軸が東北—西南の土坑墓は11基と前者がやや多い。また、南半部では区画を伴わずに計137基の土坑墓が検出され、長軸が尾根筋に直交するもの66基、平行するもの63基、斜交するもの7基、不明1基であった。これらは5グループに分けられており、各グループによって直交タイプ—東西と平行タイプ—南北の割合は異なるが全体としてみるとほぼ拮抗する。これらいずれの場合も、長軸方向を等しくする土坑墓が固有の群をなしてはおらず、長軸直交が一定の集団的特徴の中で発現したとみなせる点は墳丘を伴う場合と変わらない。

このように同一埋葬空間、同一墳丘上において埋葬施設の長軸を直交させる措置は、少なくとも弥生時代後期においては一般的に行われたようだ。そして、長軸を東西にもつ埋葬が多数を占め、ほぼ拮抗して認められる場合もあるが南北は基本的に少数派であった。空閑地のあり方からみて、いずれも長軸を捕えることが物理的に困難であったわけではなく、長軸を直交させることができ選択的行為として行われ

た蓋然性は高いと思われる。同様のことは、例えば近長丸山1号墳に関して言える。すなわち、中心の第1主体にはほぼ直交して第2、第4、第5主体が東南—西北に長軸をもつように配置されていた。また、4基の箱形石棺が検出された竹田5号墳の場合は、中央北棺、中央南棺、南棺の3基が東西に長軸をもち、南北は東棺1基であった。頭位に関しては、2体合葬で対置埋葬がなされた中央北棺は東頭位、西頭位各1、中央南棺は東頭位1、南棺は東頭位2、東棺は北頭位1であったことが判明している。中心埋葬であったか否かを問わなければ、やはり東西長軸から東頭位が多数派である。

同一墳丘上において頭位を違えた埋葬が行われた場合に、埋葬施設の長軸直交が顕現する。墳丘を異にした場合には、同一古墳群において東頭位と北頭位が混在するということになるが、これは一連の营造と考えられる古墳群において散見される事象である。例えば、竹田古墳群では5号墳において東頭位が多数派であったことは先に述べたが、これに加えて9号墳の中央棺と北棺はやはり東西に長軸をもち前者は東頭位と推定される。一方、6号墳と7号墳では南北に長軸をもつ箱形石棺が各1基検出され、いずれも北側から枕石が検出された⁽¹⁴⁾。おそらく、群を形成した集団的枠組みの中で、別個に墳丘を営むに至った関係と併せて、頭位に関しては選別意識が働いたと考えられる。

埋葬施設の長軸直交は、基本的には頭位、おそらく東頭位(東南を含む)か北頭位(北東を含む)かという選択の結果として現れた事象であったと考えられる。初期段階における前方後円墳秩序の下層構造についてはなお不明瞭な点が少なくないが、頭位に関しては弥生時代からの伝統のうちにあり「古式前方後円墳の定式」とは軸を一にしてはいなかったと仮定するならば、日上天王山古墳の中心石棺はこの地域の伝統性からも逸脱していたことになり、方位意識を封じ込めた別の要件が作用したと考えざるを得ない。

4. 頭位と前方部の方位

前方部をもたない中小墳では、基本的に東頭位、場合によっては北頭位がとられ、結果として同一墳丘上において長軸直交という事象が発現したと理解される。日上天王山古墳では、長軸直交は認められたものの、中心石棺は北頭位ではなくほとんど類例が認められない南頭位と推測された。この点に関しては、どのように理解すればよいであろうか。

既に述べたように、中心石棺の構築時に第2石棺を設けることがすでに予定されていた可能性は否定できない。この場合に、後者が前者の頭部側に重複してしまうことを避けて南頭位とした可能性は如何であろうか。つまり、中心埋葬といえども頭位の設定はきわめて他律的であったことになる。単に、第2石棺を後から設けるだけであったならば中心石棺に平行させて、すなわち墳丘主軸に沿って設けることは決して不可能ではなかったはずである。しかし、既にみたように同一墳丘上で頭位を違えるという措置が選択的にとられた可能性は高く、第2石棺の場合もその枠組みの中で東頭位がとられたのではないかと推測される。つまり、頭位に対する認識ははらかの形で存在していたとみなければならない⁽¹⁵⁾。

日上天王山古墳の場合、中心埋葬の頭位が弥生時代からの地域の伝統性、あるいは古式前方後円墳の一般的な傾向から逸脱していたばかりではなく、前方部が北側に設けられた点も異彩を放つ⁽¹⁶⁾。吉備における前期前半段階⁽¹⁷⁾の前方後円(方)墳に限ってみた場合、前方部の方位は大きく3群に分けられる。第一は、南を指向した一群で、七つ丸1号墳、操山109号墳、中山茶臼山古墳、宍甘山王山古墳、花光寺山古墳などのほか、矢藤治山古墳もこれに含まれる。これらは墳丘主軸に平行して前方部側を足位とすることにより北頭位となるが、矢部大塙古墳のように斜交して北頭位とされた例もみられる(宇垣

1991)。第二は、西を指向した一群で備前車塚古墳、都月坂1号墳、美和山1号墳、植月寺山古墳などがあげられ、宮山古墳もこれに属する。ただし、備前車塚古墳や都月坂1号墳では中心埋葬は墳丘主軸に直交していたのに対し、宮山古墳では平行して設けられていた。第三は東を指向した一群で、浦間茶臼山古墳、網浜茶臼山古墳、尾上車山古墳、諏訪神社裏古墳などがこれに該当する。第二、第三群の場合には、埋葬施設の長軸を墳丘主軸に直交させることにより北頭位の埋葬が可能である。特に時期を限らなければ、各々の事例は格段に増す。一方で、前方部が北側に設けられた例としてあげるのは近長四ツ塚2号墳、真加部観音堂古墳のほか、築造時期が下って金藏山古墳、佐古田堂山古墳などきわめて限られる。金藏山古墳では墳丘主軸に直交して2基の竪穴式石室が設けられており、いずれも東頭位であったと考えられる(西谷他 1959)。

墳丘の主軸が明確となる前方後円(方)墳の場合、当初は選地や地割りの段階から方位が十分に意識されていた。しかしながら、次第に頭位が実際方位から解放されつつ、墳丘主軸に対して平行か直交かという原則が定着するに至ったのではないかという見通しは既に述べられた通りである(北條 1987)。頭位に対する厳格性が弛緩し始めたということは、かかる原則の存在を前提として、墳丘主軸の振れも大きくなり始めたことを意味する。例えば、墳丘主軸を北東—南西にもたざるを得ないような地点に築造された機会も増えたわけであるが、櫛原寺山古墳のように中心埋葬が墳丘主軸に平行して設けられた場合には頭位は北東、用木3号墳第1主体のように直交する場合には北西とされることが一般的ではなかったかと推察される⁽¹⁸⁾。すなわち、各々が南西や南東ではなかった点に厳密に北を指向した意識の名残をみてとれる。とはいものの、北を指向する意識が単に時間の経過の中で漫然と希薄化したとは限らない。また、頭位に関して異なる思想をもった政治勢力との結びつきを前提とした説明が可能な場合もありうる(都出 1986:p20)。

前方部の方位に関しては、先にみたように必ずしも一定の傾向性は見出せない。しかし、前方部を北に設けた例がきわめて少ないと注意される。北頭位の意識が保持される中で前方部を北に設けるということは、平行型の場合には頭位と前方部の方位が一致することを意味する。この点に関して、頭位と前方部の方位との関係を知りうる諸例では、平行型の頭位は基本的に前方部とは反対側であったことが窺い知れる⁽¹⁹⁾。前方部を南側に設け北頭位とすることが平行型の定式であったならば、厳格な方位規制から解き放たれる中で二つの途が用意されていたことになる。第一はあくまでも北頭位を貫徹する途であり、第二は前方部の反対側を頭位とする一墳丘における関係を保持する途である。いずれも前方部の方位を南にとり得ない、あるいは著しく困難な地形的制約を受けた地点を選択した時点で直ちに起こり得たことである。第二の途によりどの程度のヴァリエーションが生じたかは直ちに明らかにし難いが、日上天王山古墳の中心石室が南頭位であったことはこのような想定をもとに説明づけられる。したがって、日上天王山古墳が前方部を北に向けて築造された事由が問題となるが、これが地形上の制約であったならばそのような地点が選択された背景にも留意せねばならないであろう。ただし、特別な政治的関係に基づいて南頭位であることが積極的に指向されたならばこの限りではないが、現段階ではこのような関係は確認されない。

中小墳では、基本的に東頭位ないし北頭位とされ前者が優位であったことが窺える。また、日上天王山古墳に遡れて築造された正仙塚古墳は前方部を南に向け北頭位の埋葬が行われたと推測されるから、首長墳における北頭位の指向性は必ずしも消失していたわけではない。にも関わらず、前方部を北に設けた日上天王山古墳では中心石室の頭位を前方部とは反対側にするという原則が守られた。つまり、北

頭位は第一義的な要件とはみなされなかつたのであり、このことは埋葬施設の種別や構造などと併せて前方後円墳の定式とは何か、という問い合わせがなお欠かせないことを改めて示している。

特色の第三点である壁体最下段構造に関しては、調査団の一員であった渡辺健治氏の指摘を受けその考察の一端を取り込ませていただいた。また、一宮天神山2号墳から出土した遺物の実見にあたり近藤義郎先生、鎌木英子夫人並びに亀田修一氏に御骨折りいただき、また調査時の所見について亀田修一氏に教示をいただいた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。
(倉林真砂斗)

註

- (1) 具体的内容については、発掘調査担当者である津山弥生の里文化財センターの坂本心平氏に教示いただいた。
- (2) 本文中の偏半鏡は、基本的に(近藤編 1991)による。
- (3) 註(1)と同じ。
- (4) なお詳論は不明ながら、三角縁四神四獸鏡、平縁半円方形帶神獸面像鏡、三角縁四獸鏡、鉄鏡、短剣などが出土した那覇音山古墳の竪穴式石槨にも円鏡が用いられたようである(土居 1986)。また、赤堀古墳では円鏡を用いた羅床土上に木棺が置かれていた(近藤 1986a)。
- (5) 僧後北部の東城町に所在する大迫山1号墳でも円鏡を小口積みした竪穴式石槨が検出されているが、こちらの内法長は5.2mと長い(古瀬 1996)。石材と石材の間に黄色粘土を詰めることにより、円鏡を積み上げる不安定さが克服されたようである。内法幅は1.1~1.15mを測ることから後で述べる指標値は約22を示し、日上天王山古墳の竪穴式石槨に近似する。
- (6) 北側部分は損壊しているものの本来の小口幅は46cm程度と推測されるので、洞小口幅の平均値を41cmとして指數を算出する。
- (7) 一宮天神山2号墳の石槨規模は、(鎌木他 1986)の実測図から読みとった。
- (8) これらのはかに、那覇音山古墳の竪穴式石槨も墳丘主軸に平行、すなわち北東ー南西に長軸をもつと推測される。
- (9) 僧中北部の阿倍郡皆西町に所在する光坊寺1号墳の第Ⅳ主体部は、木棺痕跡の幅から南頭位と推測されている(高畠他 1977)。
- (10) 第Ⅱ主体部は遺存状態がさわめて悪く、長軸は東北ー西南であったことが窺えるものの頭位に関しては不明である。なお、報告書では第Ⅱ、第Ⅲ主体部はしばらくの時間をおいてから設けられたと考えられている(高畠他 1977:p559)。
- (11) 12号墳では埋葬施設は検出されなかつたが、墳頂東南部で枕石と考えられる礫が4個出土したことから東南頭位であった可能性が考えられる。
- (12) また、竹田5号墳中央火棺のように、東頭位と西頭位の被葬者がほぼ同時に埋葬されたと報告された例もある(今井他 1984:p20)。9期並行段階の大畠1号墳や2号墳では、枕に転用されたと推測される杯が東西両小口付近から出土しており、依然として対置埋葬が続いていることが窺える(行田他 1993)。
- (13) 七つ丸1号墳の南側には尾根筋に直交して小形の前方後方墳(5号墳)が建造されており、その中心埋葬の長軸は墳丘主軸に平行していた、すなわち東西に長軸をもっていた。つまり、5号墳は1号墳と墳丘主軸を直交させて建造されたわけであるが、厳しい地形上の制約の中でこのような措置がとられた点は看過できない。
- (14) 7号墳の頭位に関しては報告書(今井他 1984)のFig.18及び国版から北頭位と推断したが、記述及びFig.22によると東頭位であったことになる。いずれにしても、北頭位が少數ながらも混在した事実に変わりはない。

- (3) 既に述べたように、一宮天神山2号墳ではA主体の頭位側にB主体が設けられており、後の埋葬が中心埋葬の頭位か足位かを格別に意識していたわけではないことが窺える。
- (4) このことは、本報告p37で澤田秀実が指摘するように後円部を尾根の先端側に、すなわち前方部を尾根の基部方向に向けて築造されたことを意味する。
- (5) 基本的に、(近藤義郎 1991)における1～2期が該当する。
- (6) 墓葬施設の長軸が墳丘主軸に斜交する点を「企画」の一つとして積極的に評価し、首長層の政治的動向を窺う視点とする論考もみられる(福永 1990)。
- (7) 雪野山古墳(都出他 1992)は前方部を北東に向けて築造されており、墳丘主軸にやや斜交して設けられた竪穴式石室は北頭位であった。また、忍岡古墳(梅原 1937)も前方部は北側に設けられており、中心石室はやはり北頭位と推測される。つまり、いずれも頭位は前方部側であったことになる。両者は3期墳の墓造とみなされ、前方部の方位とは異なりなく北頭位の意識が貫徹された、あるいは頭位意識の方が優っていたことを示している。

引用・参考文献

- 今井 駿 1987 「美作の前方後方墳四題」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会
- 今井 駿他 1969 「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会
- 今井 駿他 1984 「竹田墳墓群」竹田遺跡発掘調査報告第1集 綾野町教育委員会
- 宇垣匡雅 1991 「矢太大塚古墳」「前方後円墳集成」中国・四国編(近藤義郎編) 山川出版社
- 梅原末治 1937 「河内四條塚村忍岡古墳」「近畿地方古墳墓の調査 上野園社二子山古墳の調査」日本古文化研究所報告第4 日本古文化研究所
- 小野利幸 1992 「近長丸山古墳群」津市埋蔵文化財発掘調査報告第41集 津市教育委員会
- 小都 隆・高倉浩一他 1981 「石鶴山古墳群」広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター
- 鎌木義昌他 1986 「一宮天神山古墳群」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 木下 豊 1994 「中山大塚古墳」「大和を振る XIV 1993年度発掘調査速報展」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 河本 清・博瀬昭彦 1979 「久米三成4号墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(30) 岡山県教育委員会
- 近藤義郎 1983 「第9章 部族の構成 2 墳丘併葬」「前方後円墳の時代」岩波書店
- 近藤義郎 1986a 「赤崎古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1986b 「王子中古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1986c 「雲山鳥打弥生墳丘墓群」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1986d 「都月坂2号弥生墳丘墓」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1986e 「植原寺山古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 近藤義郎他 1987 「兩山市 七つ塚古墳群」「七つ塚古墳群発掘調査団
- 近藤義郎編 1991 「前方後円墳集成」中国・四国編 山川出版社
- 近藤義郎他 1991 「國山市 浦原町茶臼山古墳」「浦原町茶臼山古墳発掘調査開
- 近藤義郎他 1992 「植葉弥生墳丘墓の研究」植葉刊行会
- 近藤義郎他 1995 「岡山市 矢藤治山弥生墳丘墓」「矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査開
- 近藤義郎他 1996a 「新本立坂」総社市文化振興財団
- 近藤義郎他 1996b 「伊与部山古墳群」総社市文化振興財団
- 澤田秀実 1993 「前方後円墳の成立過程」「研究紀要」 XII 東京都埋蔵文化財センター
- 下澤公明他 1977 「横見墳墓群と横見古墳群の調査」「中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査9」岡山県埋蔵文

- 化財発掘調査報告 15 因山県教育委員会
- 高橋 駿他 1986 「宮山古墳群」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 武田恭彰他 1993 「牛筋山古墳群」総社市埋蔵文化財発掘調査報告 12 総社市教育委員会
- 高畑知功他 1977 「二野遺跡・光坊寺古墳群」「中國縱貫自動車道建設に伴う発掘調査 9」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 15 岡山県教育委員会
- 辻村純代 1983 「東中国地方における箱式石棺の向棺複数埋葬」「季刊 人類学」第14巻第2号 京都大学人類学研究会
- 都出比呂志 1981 「埴輪編年と前期古墳の新古」「王陵の比較研究」(小野山南編) 京都大学文学部考古学研究室
- 都出比呂志 1986 「堅穴式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史研究室
- 都出比呂志他 1992 「吉野山古墳Ⅱ」雪野山古墳発掘調査団
- 津山市教育委員会 1996 「有本古墳群・有本遺跡現地説明会資料 ~津山総合流通センター建設予定地内遺跡~」
- 土居 雅 1969 「美作鏡野町土居妙見山古墳」「古代吉備」第6集 古代吉備研究会
- 土居 雅 1975 「第3章 資料報告 2 田邑丸山古墳群」「津山市文化財年報」1 津山市教育委員会
- 土居 雅 1986 「那智音山古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 中山俊紀 1988 「才ノ崎古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集 津山市教育委員会
- 新納 久 1991 「第5章 総括 第3節 石棺構造とその最年の位置」「岡山市 浦間茶臼山古墳」浦間茶臼山古墳発掘調査団
- 西谷真治他 1959 「金蔵山古墳」「倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館
- 春成秀爾他 1969 「備中瀬音村鈴谷1号墳墓発掘調査報告」「古代吉備」第6集 古代吉備研究会
- 平井 駿他 1982 「殿山遺跡・殿山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 47 岡山県文化財保護協会
- 福永伸哉 1990 「第8章 考察 3 主軸斜交主体部考」「鳥居前古墳 一総括編」大阪大学文学部考古学研究報告第1冊 大阪大学文学部考古学研究室
- 古瀬清秀 1996 「4 古墳時代 大迫山古墳群」「東城町史」第1巻 自然環境考古民俗資料編 東城町
- 北條芳隆 1987 「第8章 考察 1 墳丘と方位からみた七つ塚1号墳の位置」「岡山市 七つ塚古墳群」七つ塚古墳群発掘調査団
- 間壁忠彦 1968 「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例」「倉敷考古館研究集報」第4号 倉敷考古館
- 間壁忠彦他 1968 「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」「倉敷考古館研究集報」第5号 倉敷考古館
- 間壁忠彦他 1974 「女男岩遺跡」「倉敷考古館研究集報」第10号 倉敷考古館
- 間壁忠彦他 1977 「岡山県真庭町黒宮大塚古墳」「倉敷考古館研究集報」第13号 倉敷考古館
- 光井清三郎 1903 「美作考古界(三)」「考古界」第2編第8号 考古学会
- 濱 哲夫 1990 「美作の鏡と古墳」「津山郷土博物館特別展図録第3冊 津山郷土博物館
- 濱 哲夫 1992 「一貫東遺跡 一津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 9-1」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集 津山市土地開発公社・津山市教育委員会
- 村上幸雄 1987a 「法蓮40号墳」総社市埋蔵文化財発掘調査報告 4 総社市文化振興財团
- 村上幸雄 1987b 「長砂古墳群」総社市埋蔵文化財発掘調査報告 5 総社市文化振興財团
- 保田義治 1989 「茶山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集 津山市教育委員会
- 山廢康平他 1978 「中山遺跡」落合町教育委員会
- 行田裕美他 1992 「長畝山北古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集 津山市教育委員会
- 行田裕美他 1993 「大畑遺跡-津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 7-1」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集 津山市土地開発公社・津山市教育委員会
- 渡辺健治 1965 「美作慈里式石棺調査報告」「古代吉備」第2集 古代吉備研究会

第5節 壺形土器

日上天王山古墳の発掘調査で発見された古墳に確實に伴う土器は、東くびれ部発見の壺形土器口縁部1点(第36図-1)で、遺存状態も悪く細かい特徴の把握しがたいものである。しかし、日上天王山古墳の築造年代を決める上で重要な指標ともなりうるものであり、不十分な点は承知の上で、その位置付けについて、以下追求する。

美作では、古式の古墳に伴い発見されている土器は非常に限られる。出土例には、美和山古墳群⁽¹⁾(器台形土器や埴輪)、鏡野町赤崎古墳⁽²⁾(壺形土器)、樋原寺山古墳⁽³⁾(壺形土器、第44図-1)、近長丸山1号墳⁽⁴⁾(壺形土器、第44図-2)、などがある。

赤崎古墳は墳頂45mの前方後円墳で、昭和35年岡山大学医学部第2解剖学教室の近藤義郎により調査された。中心主体部は木棺葬床で、埴輪の発見はなかった。中心主体に伴い船載の盤竜鏡1面、短冊形鉄斧、手斧、刀子、勾玉、ガラス製小玉が発見されている。赤崎古墳出土の壺は、高さ36cmの二重口縁壺で丸底を呈する。主体部が葬床であることから、前Ⅱ期の古墳とされ⁽⁵⁾、土器の年代観も古墳の時期から逆に推定されている。実測図の公表はないが、実物と写真で見る特徴からは、いわゆる布留式の古手に相当するとみられる。

樋原寺山古墳は、墳頂50~55mの堅穴式石室をもつ前方後方墳で、盗掘により平縁半円方格帯四獸鏡1面、硬玉勾玉、碧玉管玉などとともに、土器類1点が発見されている。この壺は、いわゆる布留形壺で、形態的な特徴から布留式壺のなかでも古手のものに類似する。

近長丸山1号墳は、直径20mの円墳で、長辺2.93m、短辺1.85mの組合式木棺とみられる主体部をもち、5基の埋葬施設が発見された。中心主体部にともない、内行花文鏡1面、獸形勾玉を含む勾玉2点、管玉19点、鉄製短剣1口が発見されている。中心主体に直接伴う土器は発見されていないが、第44図-2の壺形土器が棺として使用されており、この上器の口縁部のつくり及び胴部形から判断して、この壺も相対的には布留式の古手の土器に対応する特徴を備えている。

しかし、以上の3点とも布留式の古手に対応し、日上天王山古墳出土の壺形土器と時期的に近いとはみられるが、それぞれ系譜及び器種が相違し、直接比較する材料とはならない。

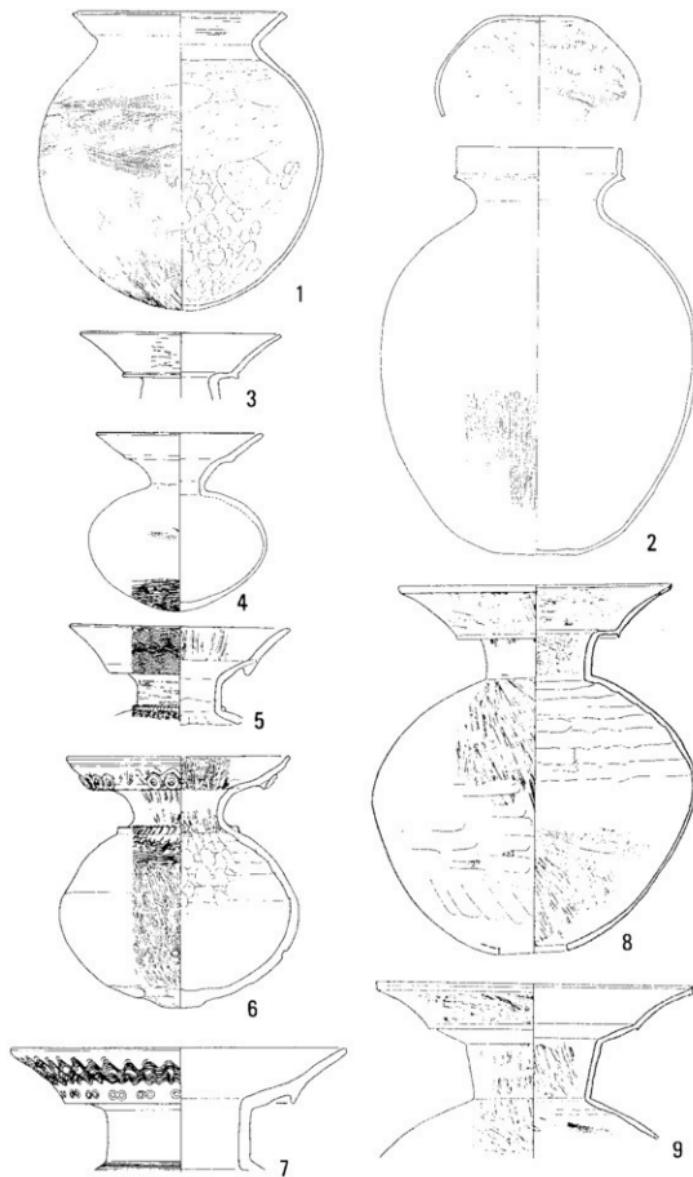
そこで、次に岡山県南部の集落遺跡から発見されている類似の二重口縁壺にあたることにする。

管見にのぼったものを以下列挙すると、

- 1 足守川矢部南向遺跡⁽⁶⁾ 竪穴住居62号上層出土壺形土器(第44図-3)
- 2 足守川加茂B遺跡⁽⁷⁾ 竪穴住居51号出土壺形土器(第44図-4)
- 3 ◇ 竪穴住居106号出土壺形土器(第44図-5)
- 4 ◇ 斜面堆積出土壺形土器(第44図-6)
- 5 津守遺跡西川調査区⁽⁸⁾ 溝-3出土壺形土器(第44図-7)

などがある。

4は口縁部外面に櫛描波状文を、その下に円形浮文を巡らし、肩部に凸帯を巡らすなど、装飾性の強い畿内第5様式から庄内期に通有の形態をもつ二重口縁壺で、胎土からみて畿内からの搬入品と考えられる。3及び5も、口縁部立上がり外面に櫛描波状文を巡らし、5はその下に竹管文を、3は肩部に凸帯を巡らせる。以上3点は、一連の二重口縁壺形土器で、天王山古墳発見の壺に先行する同系土器と



第44図 二重口縁壺の類例 (1/4、2は1/8、8・9は1/6)

みられ、同時発見の土器には、平底の壺や縁手の脚部をもつ高环などが多く存在する。発見状況からみて、県南部編年の才ノ町Ⅱから下田所式にかけての範囲のなかには納まるものであろう。

2は、二重口縁壺ではあるが小形に属し、形態的にも中国山地や山陰の弥生時代壺形土器に類似する要素が強い。伴出した壺形土器は、高橋編年⁽⁹⁾にあてはめると庄内式に対応される10期のものと考えられるが、天王山古墳出土の壺形土器とその系譜からみて、直接比較することは困難である。

装飾性が希薄でより後出的要素が強いという点で、天王山古墳出土土器に類似するのは、2の矢部南向遺跡出土のものである。しかし、この壺が発見された矢部南向遺跡堅穴住居62号上層の同時発見資料は、高橋編年にてらすと、庄内式以前に対応される9期の壺から庄内期最終末期に対応されるとする10-11期のものまでが含まれるようであり、所属時期を限定するのは困難である。

ただし、両者の類似から所属年代が近いものであると推定すれば、吉備形壺を10期とし庄内式に対応させ、布留形甕出現以降を11期として布留式に対応させる高橋編年を介在させれば、畿内編年の庄内期に対応するものとなる。

とはいっても、以上の土器も天王山古墳出土のものと直接対応させるには、土器の系譜から推測してもきわめて困難であり、最後に類似資料の発見されている奈良県の箸墓(第44図-8、9)⁽¹⁰⁾や桜井茶臼山古墳⁽¹¹⁾、京都府椿井大塚山古墳⁽¹²⁾などと直接対比し、畿内の編年の中でその位置をさぐってみたい。

そのため、以下寺沢編年⁽¹³⁾を基準とする。

寺沢薫は、小林行雄の考え⁽¹⁴⁾を踏襲し、小形三種土器の存在を基準として「土師器」を設定しているが、その始源を、その祖形出現時期まで遡らせている。その上で、後続型式である布留式土器を差し引いたものが庄内式であるとして布留式を細分する。

さらに、両者を分ける布留式土器の出現を、布留式甕とこれに伴う布留影響甕の出現及び小形精製土器の完備という二要素に求め、具体的には布留以前ともあるいは混交物とも評価される辻土坑下層出土土器が、上記の二要素を完全にみたすものであるとして、この一括資料を基準とする。この大区分に基づき、庄内式を0から3式に4区分し、布留式土器を0から3、4古、4新式に6区分し、布留0式を庄内から布留への過渡的様相を示す様式として捉えている。個別的には、箸墓古墳出土壺形土器に新古の様相差を認め、古相を庄内最新の3式と推定し、おおむね布留0式の範疇で捉えている。また、布留0式の様相から考えて、定式化した大型前方後円墳は、庄内期に遡る可能性は薄いとする。

以上の大前提で、茶臼山古墳形の二重口縁壺を編年しているが、その編年にてらすと、日上天王山古墳出土の壺は、立ち上がり接合部が外方に張り出す特徴や頸部以上の形態的特徴の類似から、布留1式に近いものとなる。

(中山後紀)

註

- (1) 中山後紀 1992 「史跡美和山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集 津山市教育委員会
- (2) 近藤義郎 1986 「赤船古墳」「岡山県史」第18巻考古資料 岡山県
- (3) 河本 清 1988 「美作町椿原寺山古墳出土の土師器について」「古代吉備」第10集 古代吉備研究会
- (4) 小郷利幸 1992 「近長丸山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集 津山市教育委員会
- (5) 安川豊史 1991 「美作」「前方後円墳集成」中四国編 山川出版社
- (6) 江見正己編 1995 「足守川矢部南向遺跡」「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第94集 岡山県教育委員会

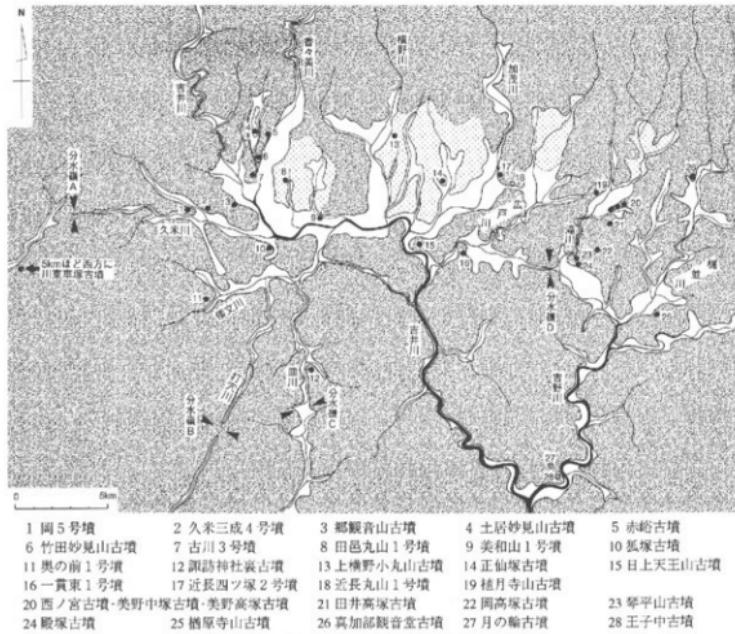
- (7) 光永真一編 1995 「足守川加茂B遺跡」『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第94集 岡山県教育委員会
- (8) 大橋雅也編 1995 「西川調査区」『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第98集 岡山県教育委員会
- (9) 高橋 康 1991 「土師器の編年、中国・四国」「古墳時代の研究」6 雄山閣
- ⑩ 笠野 敏也 1975 「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号 宮内庁陵墓課
- ⑪ 上田宏範他 1961 「桜井茶臼山古墳」奈良県史跡名勝記念物調査報告書第19冊 奈良県教育委員会
- ⑫ 近藤義郎編 1986 「椿井大塚山古墳」 山城町教育委員会
- ⑬ 寺澤 黒 1968 「鏡内古式土師器の編年と二・三の問題」「矢部遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊 奈良県教育委員会
- ⑭ 小林行雄 1935 「小型丸底土器小考」「考古学」第6卷第1号

第6節 美作地方における政治勢力と諸関係

1. 空間的枠組みと政治勢力

往時の政治勢力の実体を捉える上でまず第一に問題とされるのは前方後円墳の分布状況であるが、言うまでもなくこれは地理的環境と不可分の関係にある。美作地方の水系は大きくみて吉井川水系と旭川水系に分けられ、前者の久米川と後者の河内川の上流域が分水嶺Aとなっているためこれを境にして美作を東部と西部に分けることにする(第45図)。小論では、前期の前方後円(方)墳の多くが分布する東部に限って考察を加える。

吉井川水系はいわゆる津山盆地を形成しており、多数の支流が東西南北各方向から集まる。その中にあって、分水嶺Dにより吉井川水系から吉野川水系を切り離すことができる。吉井川と吉野川が合流する地点の山頂部には、前方後円墳10期区分⁽¹⁾の4期末ないし5期初頭の大形円墳である月の輪古墳が所在する。早くに近藤義郎は、月の輪地域においてなされた政治的統一を意味づけるにあたって本論の滝川地区及び梶並川地区も視野に入れた検討を行っている(近藤 1960)。本論との関わりから言えば、美野地域(本論の滝川北地区)、勝間田地域(同滝川南地区)、橋原地域(同梶並川地区)、月の輪地域という四つの首長系列を認め、これらを相対的自立性を趣った最小の政治的単位地域として評価した。一方、旭川は大きく蛇行しながら南流しており、吉井川水系に属する打穴川や黒川を越えて分水嶺B及び分水嶺Cを越えて南下すると旭川流域に達する。



第45図で示したように、沖積地の広がりをほぼ限定できる点は政治勢力を規定する上で重要である。しかし、このことはこの地域が閉鎖的であったことを必ずしも意味しない。すなわち、南方へは吉井川を下ると備前中郡へ、また旭川を下ると備前西部及び備中東部に至る。西方へは、旭川の支流である備中川を遡ると備中北部(現在の北房町)に至る。また北方へは、旭川を遡って幕山高原に至り日本海側の倉吉市へと続く美作街道が続く。また、吉井川沿いも人形峠を越えて同様に倉吉市に至る、いわゆる津山往来となっている。東方に目を転じ吉野川を遡って姫新線沿いに美作土居で峠を越えると、播磨西端の千種川上流域に出る。さらに姫新線沿いに東に向かい峠を越えると揖保川の中流域へ、あるいは千種川を下り途中で山陽線沿いに東に向かうと揖保川の下流域へ出る。以上の点をふまえると、狹小ながら流域平野が連なる美作中央部は各方面へ出るための交通ルートとして重要な位置を占めていたと推測される。

現在のところ、美作地方では前方後円墳が47基、前方後方墳が9基の計56基が確認されている⁽²⁾。これらの分布状況には疎密が認められ、特に滝川流域、加茂川流域、吉井川流域及び香々美川流域などでは継続的に营造されたことが窺える。発掘調査その他によって築造時期をある程度絞り込める例は多くないが、大まかな推移を勘案すると大形円墳の月の輪古墳が築造された段階を一つの画期とみなすことができる(安川 1991)⁽³⁾。したがって、本論では日上天王山古墳の位置づけを推し量るという観点から、この段階までの营造状況に特に注目したい。なお、墳丘形態の特色及びくびれ部出土の二重口縁壺形土器からみて、日上天王山古墳は1期後半から2期の築造であることを前提として考察を進みたい。

地理的環境をふまえて指定される流域境界は、次の通りである。分水嶺Dによって吉井川水系から切り離される吉野川水系は、さらに滝川流域と梶並川流域に分けられる。滝川流域は、上流の北地区と下流の南地区に二分できる。この吉野川水系では7基の前方後方墳が確認されており、美作地方では他に皿川流域の諏訪神社裏古墳及び久米川流域の久米三成4号墳(河本他 1979)を挙げうるにとどまる⁽⁴⁾ことから、その集中性が注目される。滝川北地区の北縁部では墳長91.5mを測る美作最大規模の植月寺山古墳(光水 1986)が、また滝川を挟んで対岸の美野丘陵上には美野高塚古墳、美野中塚古墳、西ノ宮古墳の3基が近接して築造されており、これらが系譜的な繋がりをもつことは間違いない。また、滝川の沖積平野を臨む山腹中部には田井高塚古墳が、山頂部には岡高塚古墳が所在する。墳長67m前後の美野高塚古墳は美作東部地域では植月寺山古墳に次ぐ規模で、美野中塚古墳と岡高塚古墳はほぼ同規模で墳長55m前後、西ノ宮古墳と田井高塚古墳は40m前後とやや小形である。一方、梶並川の下流域(南地区)には墳長50~55mの前方後方墳である柄原寺山古墳が所在する。これらが吉野川水系で確認されている7基の前方後方墳である⁽⁵⁾。梶並川の上流域(北地区)には、墳長約42mの前方後円墳である真加部觀音堂古墳が所在する。

以上の諸墳のうち、出土遺物から築造時期を推定できる例は限られる。第一は、かつて竪穴式石槨が開口していた折にその略測が行われた植原寺山古墳で、倭製の平縁半円方格帯四獸鏡1、勾玉1、鉄劍・鉄刀・鉄斧など鉄器類、古式土師器1などの出土が知られている(近藤 1986b)。この土師器は壺形土器で、備中における編年観に照らせば龟川上層式に比定される(河本 1988)。確言はできないものの、植原寺山古墳の築造時期は2期前後と考えておきたい。第二は現在竪穴式石槨が一部開口している岡高塚古墳で、副葬品は本墳出土と伝えられる倭製四獸鏡のほか筒形銅器と鉄劍が知られている(今井 1987)。その築造時期は、筒形銅器が副葬されたことをふまえて3~4期墳とみてよいであろう。岡高塚古墳の南側緩斜面には部分的ながら平坦地が作出されており、この古墳が滝川南地区の平野側を意識

して築造されたことは明らかである。一方で、沖積平野からかなり離れた標高267mという最高所に立地し、眼下の南地区はおろか北地区や瀧川と梶並川の合流地点付近をも臨める点に際立った特色が表れたと言える。墳丘形態に関しては、前方部が撥形に開く、後方部と前方部の頂部平坦面の比高が大きい、など古式特徴を備えた例として植月寺山古墳や美野中塚古墳などが挙げられる。

吉野川水系の前方後方墳のうち円筒埴輪が確認されたのは美野高塚古墳だけで⁽¹⁰⁾、他は「月の輪以前」に位置づけられる可能性が高い。また、いずれも葺石が施されたと考えられるが、円窓か角窓かという区分からみた用材の違いが目につく。例えば、植月寺山古墳ではやや小振りの角窓が、岡高塚古墳では大振りの角窓が、美野高塚古墳では小振りの円窓が目立つ中で角窓が散見される。一方で、美野中塚古墳、西ノ宮古墳、真加部観音堂古墳などは円窓には限られる。もとより多くの制約を伴う地表観察に基づく知見に過ぎないが、日上天王山古墳では葺石に円窓が多用されたことは間違いないこのような違いが認められる点に留意したい。

瀧川南地区及び梶並川南地区では9基の前方後円墳が確認されており、うち2基は帆立貝型である。これらのはほとんどは墳長20~30m台の小規模墳でしばしば埴輪を伴う。いずれも詳細は不明ながら、例えば金焼山古墳のように8期前後、ないしそれ以降に築造された可能性が十分に考えられる。それらの中にあって、岡高塚古墳が占地する山塊の裾部に位置する琴平山古墳と殿塚古墳は、いずれも墳長約50mを測り円筒埴輪が確認されていない点で注意すべき存在である⁽¹¹⁾。

以上みたように、吉野川の支流域では、日上天王山古墳に連れて少なくとも植原寺山古墳と岡高塚古墳という2基の前方後方墳が築造されたと考えられる。瀧川地区及び梶並川南地区における墳形の同一性と営造数を勘案すると、「月の輪以前」に加茂川地区とは系譜を異にした政治勢力の存在を認めざるを得ない。

日上天王山古墳の周辺は沖積平野に乏しく、この古墳はむしろ加茂川世界の出入口部に位置したとみる方が理解し易いかも知れない。この加茂川地区における前方後円墳は、他に正仙塚古墳と近長四ツ塚2号墳が確認されている。正仙塚古墳は加茂川の支流である蟹子川をやや遡った低丘陵上に位置しており、墳丘測量調査の結果をふまえて墳長は55.5m、後円部径は約31mに復元され、日上天王山古墳と平面企画が相等しい可能性が指摘されている(安川他 1996)。埋葬施設は、墳丘主軸に平行して直葬された竜谷石製の組合せ式の石棺であることから(間壁他 1975)、正仙塚古墳が日上天王山古墳に連れて築造されたことは間違いない。この石棺の組合せ方はいわゆる長持形石棺と同様であるが、繩掛突起がまったく作り出されていない形態上の特色からみて長持形石棺に先行すると考えられる。加茂川世界のほぼ北端近くに所在する近長四ツ塚2号墳は墳長約45mを測り、後円部と前方部の比高が目立つ。いずれも埴輪は採集されていない。近長四ツ塚2号墳から1kmほど南に下り、勝北町へ抜ける小さな谷合いで直径約20mの円墳である近長丸山1号墳が所在する(小郷 1992)。この古墳では木棺、堅穴式石椁、箱形石棺など計6基の埋葬施設が検出されており、土器棺に用いられた壺形土器からみて築造時期は日上天王山古墳とほぼ同じか通る可能性がある。さらに、丘陵裾部沿いに南下し加茂川世界のほぼ中ほどにあたる地点には帆立貝型の井口車塚古墳が築造された(小郷 1994)。井口車塚古墳の推定墳長は約36mで、馬蹄形に近い削溝もつと推測される。各種埴輪や須恵器を伴い、5世紀末~6世紀初頭の築造と考えられている。これらの築造順序を整理すると、近長丸山1号墳→日上天王山古墳→正仙塚古墳→井口車塚古墳となり、近長四ツ塚2号墳は井口車塚古墳の前に位置づけられる可能性が高い。さらに、詳細は不明ながら、日上天王山古墳から東に1kmほどの所に径35mとされる大形円墳の飯塚古墳

が所在する。以上の諸墳は加茂川の流域を取り囲むように位置しており、加茂川地区は一つの政治的な単位地域とみなしてよい。

なお、加茂川地区と滝川地区の間には肘川の流域平野が連なる。この肘川地区には2基の前方後円墳、一貫東1号墳と茶山1号墳が所在する。発掘調査により茶山1号墳の推定墳長は20.6m、後円部径は15mを測り、8期墳に築造されたことが判明した(保田 1989)。一貫東1号墳に関しては詳細は不明ながらも、前方部は後円部に比べてかなり低い、いわゆる帆立貝型ではない、埴輪が採集されていない、などの諸点をふまえて「月の輪以前」に築造された可能性を念頭においてよい。肘川流域は、加茂川流域や吉井川流域から滝川南地区を経て播磨へ抜ける重要ルートに当たり、分水嶺Dが肘川地区と滝川地区を分断していたとはみなし難い。

香々美川から吉井川の流域においても継続的な前方後円墳の營造が知られる。この地域を香々美川・吉井川地区としよう。津市に所在する美和山古墳群は、前方後円墳の1号墳と円墳群からなり、保存整備事業の一環として発掘調査が行われている(中山 1992)。美和山1号墳は崩落部分では必ずしも墳端は明確ではないものの墳長約80m、後円部径約48m、円墳である2号墳は径34m強、3号墳は径36m強に復元されている。いずれも葺石には円礫が用いられており、線刻が施された埴輪からみて1号墳→2号墳→3号墳という推移が想定される^(a)。このような埴輪は現在のところ美作地方では類例が知られておらず、前方後円墳で執行された埴輪祭祀が大形円墳によって引き継がれた点に注意する必要がある。美和山古墳群の西方5kmほどの地点に吉井川を挟んで郷観音山古墳が所在する。その墳丘規模は墳長約43m、後円部径約28mで、竪穴式石室には円錐が用いられたようである(土居 1986)^(b)。出土遺物としては、舶載の三角縁四神四獸鏡、倭製の半円形方帯神獸鏡と三角縁四獸鏡が各1のほか、鉄劍、柳葉形や定角形の鐵鏡などが知られている(梅原 1938a)。郷観音山古墳では埴輪は採集されていない。

香々美川流域及びその支流域では、確実に前期段階とされる前方後円墳は赤崎古墳、竹田妙見山古墳、土居妙見山古墳の3基である。いずれも埴輪は未確認で葺石が施され、赤崎古墳と竹田妙見山古墳は「月の輪以前」、土居妙見山古墳は月の輪古墳とほぼ同時期の築造とみてよいであろう。赤崎古墳は、吉井川と香々美川の合流地点を5kmほど遡った香々美川右岸の丘陵上に位置し、墳長約45m、後円部径28mを測る(近藤 1986a)。先の郷観音山古墳とほぼ同規模である点が注意される。発掘調査の結果、赤崎古墳の後円部上では木棺葬床が検出され、「青蓋作竟」銘盤龍鏡1、若干の鉄器・玉類・古式土師器2が出土した。副葬品内容や底部穿孔された二重口縁壺形土器などからみて、2期前後の築造と考えられる。墳長36m、後円部径28mの竹田妙見山古墳(今井 1984)は、赤崎古墳から2kmほど南に下った独立丘陵上に位置する。埋葬施設は木棺葬床と推定され、出土遺物としては二箇所が穿孔された内行花文鏡の破片1、碧玉製管玉1、ガラス製小玉28が知られる(添 1990)。土居妙見山古墳は香々美川の支流である山人川沿いの丘陵上に位置しており、墳長25m、後円部径13.3mを測る(土居 1969)。埋葬施設は墳丘主軸に平行して設けられた2基の粘土構であることが知られており、うち1基から出土した遺物として倭製の内行花文鏡2、鉄劍2がある。

なお、築造時期に関する手がかりは不明ながら、吉井川と香々美川の合流地点近くの丘陵上には墳長約30mの古川3号墳が所在する。やはり埴輪は採集されておらず、これも前期段階に比定されるならばこの地域には4基の前方後円墳が相次いで築造されたことになる。また、やはり詳細は不明ながら推定墳長約60mの狐塚古墳が吉井川と久米川の合流地点に近い小支谷を臨む。このほか円墳であるが、

美和山2号墳や3号墳と同規模の田舎丸山1号墳が美和山古墳群にはほど近い小さな谷筋の奥部に位置する(土居 1975)。先の加茂川地区と同様に、これらは全体として香々美川及び吉井川流域の低地を取り囲むように分布しており、「月の輪以前」を通じて形成された政治的諸関係の大枠を窺い知ることができる。

加茂川と香々美川の間には宮川が南流しており、吉井川が大きく屈曲する少し手前でこれに合流する。この宮川地区では、前期に築造されたことが確実な前方後円墳は見当たらず、上流域の横野川沿いに位置する墳長35mの上横野丸山古墳が注意されるにとどまる。これに近在する大野木塚古墳は墳長約25mを測る帆立貝型で、須恵器を伴う(小郷 1996)。また、従来は円墳と考えられていた十六夜山古墳は、近年の発掘調査により墳長約60mを測り二重の周濠を伴っていた可能性が高い前方後円墳であることが判明した(尾上 1995・金田 1996)。周濠内からは円筒埴輪や器財埴輪、須恵器などが出土しており、5世紀後半から6世紀前半の築造と考えられている。この時期の美作地方における前方後円墳の築造状況からみて十六夜山古墳の墳丘規模は突出しており、「月の輪以後」の一つの画期とみなせる(古市 1995)。このような現在の知見をふまえると、宮川流域及びその周辺地が政治的な中心地となったのは「月の輪以後」と言えそうである。

以上みてきた地域とは異なり、中小河川の狭隘な沖積地を臨む丘陵地上に營造された一群がある。久米川流域の岡5号墳、倭文川上流域の奥の前1号墳、皿川上流域の諏訪神社裏古墳などで、これらは香々美川一吉井川地区とは水系によって結ばれている。いずれも墳長が50mを越え、埴輪が確認されていない点で注意される。岡5号墳は、久米川を巡って分水嶺Aを越え、さらに河内川を下って旭川流域に至る西方ルート上に位置する。諏訪神社裏古墳は、分水嶺Cを越えて旭川流域に達する皿川一誕生寺川ルート上に位置する⁽¹⁰⁾。一方、奥の前1号墳は倭文川地区の奥まった所に位置する点でこれらとは異なる。倭文川地区には他に丸尾瓢箪山古墳や瓢箪山1号墳など墳長30m台の前方後円墳が築造されており、詳細は不明ながらこれらが奥の前1号墳と共に一つの首長系列をなした可能性を考えてよい。墳長が70mに及ぶ奥の前1号墳は葺石をもつ前方後円墳で、かつて墳丘主軸に平行する石棺が検出された際に倭製の内行花文鏡1、勾玉2、菅正1、鋼鏡1、短甲などが出土したことが知られており、おそらく4期前後の築造ではないかと推測される⁽¹¹⁾。これらの位置づけを推し量るにあたっては、水系の中心に展開した香々美川一吉井川地区的政治勢力との関係をまず念頭におくべきであろう。

以上みてきたように、美作地方東部では滝川一梶並川地区、加茂川地区、香々美川一吉井川地区に主たる政治勢力が展開し、中にはいくつかの核地域を認めうる。そして中間地域や周辺地域では、これらとの間に派生的な関係をもった集団形成がなされたことが窺える。さらに、真庭郡落合町を中心とする旭川流域に所在する川東車塚古墳⁽¹²⁾や天王塚古墳などからは、「月の輪以前」の美作地方におけるさらに別の政治勢力の存在が窺い知れる。本論では、このような基本的構図を前提に考察を進めたい。

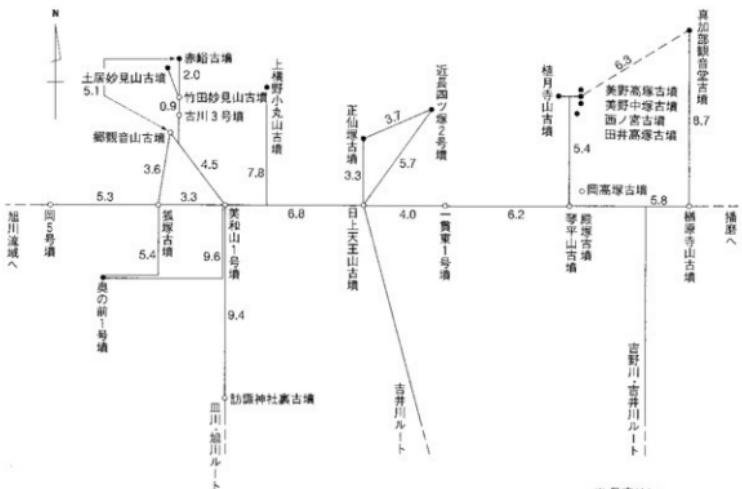
2. 諸墳の位置関係

先に美作地方における前方後円(方)墳の分布状況を概観し、分布の疎密から既に指摘されていたように複数の政治勢力の存在を窺い知ることができた。問題は、集団に関する認識をこのレヴェルからどのようにして発展させるか、である。ここで留意したいのは、前方後円墳が往時の社会で担った役割である。前方後円墳が亡き首長の葬送儀礼の場であると同時に、集団の一体性を具現しましたこれを確認するための社会的装置であったと考えるならば、その存在は長く記憶に留められ実際の生活領域の中でラン

ドマーク(目標物)たりえたはずである。

築造時期を界にする前方後円墳や前方後方墳が、一定の空間的広がりの中であるいは集中的に、あるいは点的に位置するのはなぜか。前方後円墳を往時の集団祭祀の象徴的産物とみる以上、問題は直接的であれ間接的であれ様々な関係に基づいて築造作業や各種儀礼に参加し、これを崇拝の対象としたであろう様々な集団レヴェルにあると言える。およそ集団維持が功を奏したならば、人口増加やこれに伴う居住域の拡散は必然的に起こったであろうから、一定空間内における集団関係は不斷に再編され続けたはずである。したがって、前方後円墳の分布状況を問題とするにあたり、定点的な築造時期だけではなく、既に築造された前方後円墳に対する意識作用の持続性を考慮することも重要である。この点において、築造時期が前後する場合でも、また埋葬施設の多寡とは関わりなく相互の位置関係は重要な検討課題となる。

そこで、「群在」しているならばそのあり方を、「散在」しているならば「群在」する区域との位置関係をまず明らかにしてみたい。地理的条件をふまえて最も簡単な往来ルート想定し、前方後円(方)墳相互を直線で結んで位置関係を概念的に整理すると次のような区分基準が設けられる(第46図)¹¹³⁾。なお、この図の諸墳を結ぶ直線の長さは実際の間隔距離に比例する。まず、一定程度の広がりをもった沖積平野を臨んで河川の両側に築造された地域では面的広がりを包括する回縁型となる。これに対し、単独あるいは河川の一方の側だけに築造されたために関係が単線で表される場合にこれを直列型と呼ぼう。直列型の場合は、概して回縁型よりも沖積地が狭い。このような区分とは別に、関係直線が一方に向のみ延びる場合を末端型、少なくとも二方向以上に延びる場合を経由型とする。これらの分類基準を組合せると、回縁経由型、回縁末端型、直列経由型、直列末端型の4タイプが設定される。回縁経由型は加茂川地区と吉井川地区、回縁末端型は滝川北地区、直列経由型は滝川南地区、梶並川地区、肘川地区、皿川地区・久米川地区、直列末端型は梶並川北地区・横野川地区・倭文川地区・香々美川地区となる。なお、



第46図 諸墳の位置関係概念図

* 数字はkm

香々美川地区では直線分岐点が含まれるが、同じ沖積地を臨んでいないため圓繞型とはみなさない。

では、このような枠組みの中で実際の間隔距離はどのような現れ方をしているであろうか。圓繞型を形成する距離にはばらつきがある。すなわち、美野丘陵上の諸墳と植月寺山古墳との間は約1km、日上天王山古墳—正仙塚古墳は3.3km、正仙塚古墳—近長四ツ塚2号墳は3.7km、日上天王山古墳—近長四ツ塚2号墳は5.4km、美和山1号墳—狐塚古墳は3.3km、狐塚古墳—郷観音山古墳は3.6km、美和山1号墳—郷観音山古墳は4.5kmを測る。基本的には丘陵上や台地上に築造された諸墳の間隔距離は、生活基盤の中核をなしたであろう沖積地の広狭に直接的に影響されることになる。この点、滝川北地区的沖積地は他の地区に比べて狭く、加茂川地区で8.3km²、吉井川地区では9.5km²を測るのに対して2.5km²と1/3以下である。滝川北地区で現れた値は、直列型である香々美川地区内の間隔距離に近似しており、同一地区でしか現れない2kmまでを第一レヴェルとする。

注意されるのは、日上天王山古墳—正仙塚古墳、正仙塚古墳—近長四ツ塚2号墳、美和山1号墳—狐塚古墳、狐塚古墳—郷観音山古墳が3km台でほぼ等しい点である。もっともこの間隔距離が必ずしも第一義的な意味をもっていたとは限らない。日上天王山古墳—近長四ツ塚2号墳の関係が正仙塚古墳に先駆けて、また美和山1号墳—郷観音山古墳の関係が狐塚古墳に先駆けて形成されていたならば先の3km台の値は結果的産物ということになる。かりにそうであった場合でも、既存の二墳との間隔距離をも意識して築造された可能性を排除するわけにはいかない。そこで、同一地区内であることを前提に上限に幅があることを念頭においた上で3~4kmを第二レヴェルとする。

次に経由型と経由型、経由型と末端型の間隔距離をみてみよう。滝川南地区の一群を中心にして滝川北地区的中心点まで5.4km、橘原寺山古墳まで5.8km、一貫東1号墳まで6.2kmを測りほぼ近似した値をとる。一貫東1号墳から日上天王山古墳までは4kmであるが、日上天王山古墳が加茂川世界の入口部に位置したと考えるとその中心地まではやはり5km台に達した可能性が考えられる。また、圓繞経由型の一角をなす狐塚古墳から久米川地区の岡5号墳まで5.3km、同様に倭文川地区的奥の前1号墳まで5.4km、香々美川地区的赤堀古墳は同規模墳と推察される郷観音山古墳から5.1km離れている。このように、5~6kmの値が安定的に表れているためこれを第三レヴェルとする。

さらに、このレヴェルを大きく越える値がみられる。例えば、梶並川水系では北地区的真加部観音堂古墳と南地区的樋原寺山古墳の間は8.7kmを測る。また、美和山1号墳を中心として日上天王山古墳まで約7km、上横野小丸山古墳まで7.8km、倭文川地区奥部の奥の前1号墳までは9.6km、諏訪神社裏古墳までは9.4kmを測る。これら7kmを越える一群を第四レヴェルとする。ただし、真加部観音堂古墳と美野丘陵の諸墳は水系を異にするもの的小さな谷筋を抜けて往来することが可能で、その間隔距離は6.3kmであることから第三レヴェルの位置関係にあたるとみることもできる。

滝川一梶並川地区では前方後円墳が前方後方墳に後出し、かつ関連遺物からみて樋原寺山古墳が岡高塚古墳に先駆けて築造されたと仮定すると、滝川南地区が空白地であった段階が存在したことになる。この場合、滝川北地区的中心から樋原寺山古墳までの約11kmという間隔距離が何らかの意味をもつ可能性が浮上する。この点、岡高塚古墳が滝川北地区と梶並川地区的いずれをも臨む高所に立地している点が示唆的である。同様の視点から日上天王山古墳---一貫東1号墳であった場合を想定すると、日上天王山古墳は分水嶺D以東の諸墳とは少なくとも滝川南地区までの距離である10.2kmは離れていたことになる。第四のレヴェルは、このような形で潜在している可能性がある。

前方後円墳や前方後方墳は、その墓所としての実際機能、また祖墓崇拝の場としての認識が保持され

ることにより集団的一体性の象徴たり得たはずであるから、一定の時間幅の中で発見していったであろう各レヴェルの位置関係には何らかの事情が反映されたとみたい。第一レヴェルや第二レヴェルは、同一の沖積地内において発現している。つまり、生活の基盤を共有していた、あるいはその形成維持に一定程度の協力関係を保持した集団あるいは集団群の存在が想定され、この点においてこれらのレヴェルで結ばれる諸墳を系譜関係を内包した固有の政治勢力の表象とみなせる。もとより、これらの築造に関わった集団を特定することはできず、各々を核とした集団像をイメージするにとどまる。このような認識段階にあって、周縁型が形成された背景としてさしあたって二つの可能性を挙げることができる。第一は、領域空間に対する認識と運動して、各個が意図的に配置された可能性である。この場合は、政治的な側面が色濃く出たと言える。第二は、集団の自律的な成長の結果として分岐が繰り返された中で、新たな適地が果たされた可能性である。しかし実際には、前方後円墳に纏わった二側面、すなわち集団的葬送儀礼の発達という側面と首長層の権力誇示という側面(近藤 1985:pp282-3)を勘案すると、両者を個別的に捉えることは困難と言える。

第三レヴェルと第四レヴェル、特に後者の場合は日常的な往来を想定することはやや困難であり、政治勢力の認定を行う上で一定の目安となるであろう。第四レヴェルには特に上限を設けなかったが、旭川流域の川東車塚古墳から少なくとも美作地方東部の西端に位置する久米川地区の岡5号墳までは15kmほどを測る。この値は先にみた第四レヴェルの諸例とは大きく隔たっており、第五のレヴェルの存在が窺える。もっとも、例えば植月寺山古墳から日上天王山古墳までも約16kmを測り、東部地域の中でもこのレヴェルが潜在している可能性はある。

これまで、諸墳に対する認識が一定期間持続していたことを前提として位置関係を整理してきたが、これは築造時期の検討をなおざりにすることを容認するものではない。むしろ、築造時期を検討する際の要点が一層明確になったと言える。例えば、日上天王山古墳と正仙塚古墳、及び正仙塚古墳と近長四ツ塚2号墳は第二レヴェルで、日上天王山古墳と近長四ツ塚2号墳は第三レヴェルで結ばれるが、これらの築造時期が同時的ではない以上いざれかの間隔距離は結果的に生じたことになる。この場合は、近長四ツ塚古墳と他墳との先後関係が問題となる。つまり、日上天王山古墳→正仙塚古墳は動かないとして日上天王山古墳→正仙塚古墳→近長四ツ塚2号墳の場合は第二レヴェルを保ちながら築造されたことになるし、日上天王山古墳→近長四ツ塚2号墳→正仙塚古墳あるいは近長四ツ塚2号墳→日上天王山古墳→正仙塚古墳という場合はいざれのレヴェルも有意に発現した可能性がある。言うまでもなく個々の位置関係のみが問題なのではなく、近長四ツ塚2号墳に関しては既にその内容が知られている近長丸山1号墳に表象される集団的枠組みを念頭におく必要がある。また、三種のレヴェルで結ばれる美和山1号墳、狐塚古墳、奥の前1号墳の場合も同様である。こちらは詳細は不明ながら石棺が埋設された可能性がある奥の前1号墳が美和山1号墳に後出するならば、狐塚古墳の築造時期の検討が重要課題となる。

完全とは言えないまでも「生きた分布」が明らかにされつつある地域においては、政治勢力を抽出しそれらの関係を推し量るための枠組みとしてこのような形での位置関係の整理は欠かせない。その上で、存在誇示という側面を備えた前方後円墳の分布状況から一体如何なる集団関係を想定しうるのか、という問題意識が再生できるのではないかと考える。そのためには、同様に整理された各地の營造状況を比較検討することが欠かせない。しかし、当初より与えられた条件である相互的位置関係だけから認識される集団関係には限りがある。この点、墳丘の築造企画はすべてが共有する要素であるため、地理的条件その他をふまえた上でまず検討されるべき位置関係にある諸墳から順次これを比較していくことによ

り、集団関係の枠組みは一層明瞭になると予測される。

3. 墳丘の平面企画から読み取れる関係

墳丘は立体構造物であるから、平面企画だけではなく段築や側面観も重要な要素であることは言うまでもない。一方で、墳丘の大小に基準を設げずに、まず秩序として作用した基層構造を明らかにする姿勢が大切である。そのためには、個々の墳丘の存在を説明する原理、すなわち一個墳丘の情報を置換表現できる手法が必要であり、この点は後円部径を八等分して得られた「区」を用いる方法が有効である（石部他 1979）。拙論においても、この手法を援用して房総の諸例を対象に関係連鎖の想定を試みたことがある（倉林 1996）。その中で、後円部径の較差に規則性が認められることに注目し、この点に実際の関係が反映された可能性を述べ検討されるべき基本的枠組みを提示した。この基本的枠組みは、もとより墳丘情報の質に大きく左右されるし、一つの作業仮説にすぎない。しかしながら、今後の課題を絞り込んでいく上で検討モデルとしての意味をもつはずである。また、特に大形の円（方）墳を専門におくことによって前方後円墳秩序の重要な側面が見落とされることは明らかであり、この点においても後円（方）部を個別的に扱う先の手法は適している。

今回の発掘調査の結果、日上天王山古墳は後円部径32.4m、墳長56.9mであることが判明した。したがって、後円部径を八等分した値すなわち1区の大きさは約4mで、墳長はこれの14倍、前方部の長さは6倍に当たることからいわゆる6区型となる。前方部が墳丘主軸に対称的であったならば、その前端幅は約25mに復元されやはり6区分となる。同じ加茂川地区に築造された正仙塚古墳が、日上天王山古墳と平面企画を共有する可能性が既に指摘されたことは先にふれた。正仙塚古墳は、盛土の流出により特に西側半分の等高線が大きく歪んでいるものの、東側は比較的の遺存状態が良い。墳丘測量図に基づいて復元的に把握された規模は墳長55.5m、後円部径約31mであることから、日上天王山古墳と同様に6区型である可能性は高い。さらに、後円部径約25m、墳長約45mと報告されている近長四ツ塚2号墳も6区型に復元されるならば、加茂川地区では6区型前方後円墳が相次いで築造されたことになる。

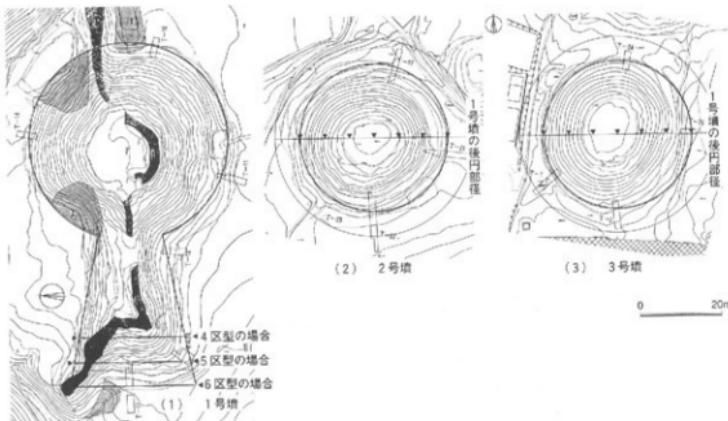
次に、同様の観点から吉井川一香々美川地区をみてみよう。当該地区の前方後円墳で墳丘の発掘調査が実施されたのは美和山1号墳で、後円部径約48m、墳長80mと報告されている。当該墳の墳端は、T-10及びT-11では明瞭に把握されなかったものT-14では基盤層を削り出した状態で確認されており、これをもとに後円部径を復元すると約48mとなる⁽¹⁴⁾。T-12で明瞭に確認された前方部側縁は、このような径復元を想定するにあたり特に矛盾しない。問題は、前方部の前端線をどこに求めるかである。T-13では多数の円礫が検出されトレンチの東端から2.3m付近が前方部前端とされたが、これらの円礫は相互に組合った状態ではなく崩落した葺石の可能性がきわめて高い。そうであるならば、本来の前方部前端はもっと墳丘よりもっと高かったと推察される。後円部径が48mとすると4区型の場合は墳長72m、5区型の場合は78m、6区型の場合は84mである（第47回の（1）参照）⁽¹⁵⁾。4区型の場合は、前方部前端の傾斜面のかなり上方に墳端が巡ることになり、径48mで4区型に復元されることはある得ない。一方、6区型に復元すると前方部前端は傾斜変換線よりもかなり前面に押し出される形となり、前端部全体に及ぶ変更を想定せざるを得ない点でこれまた蓋然性がきわめて低い復元モデルである。これらに対して5区型の場合はT-13の東端よりも1mほど墳丘の内側に入り込んで復元され、葺石の崩落を想定するならばこの点は理解し易い。T-26の南西隅部では、あたかも前方部の隅角をなすかのよ

うな段差とこれより外側に密集した円礫が検出された。これらの円礫が前方部隅角の葺石が崩落したものであるならば、埴輪はやや内側に求められるはずであり先の段差がその第一候補となる。5区型に復元される場合の前端がこの段差とほぼ一致する点が注意される。すなわち、美和山1号墳の平面企画は後円部径48mの5区型である可能性が高いと推断される。

香々美川地区の赤堀古墳は、墳丘測量図によれば前方部前端線が墳丘主軸線に対してやや斜交しているものの、後円部径に比べて前方部が短いことは一目瞭然である。また、赤堀古墳とはほぼ同規模ではないかと推察される郵観音山古墳の場合も同様である。現在のところ墳丘測量図に基づく概数値の検討に留まらざるを得ないが、いずれも6区型に復元される可能性はきわめて低く、先の加茂川地区とは異なり後円部径に比して前方部がやや短い、5区型ないし4区型に復元される一群が存在する点に留意したい。

この点をふまえた上で問題となるのは、築造時期が近接する同区型の諸墳の規模較差をどのように説明するかである。前方後円墳の中に一方が他方の整数倍となるような相似形の一群が存在することは、既に指摘され検討が繰り返されている(和田 1981・北條 1986・澤田 1991など)。このような関係が遠隔地の諸墳との間に見出せる場合に、これを政治的な結びつきとして評価することにより遺物研究とは異なる視点から時代的枠組みを組立ててみる点が重要である。問題は、時に前方後円墳の墳長を凌ぐ円墳を含めて諸墳の規模較差をすべからく説明しうるか、である。また、整数分の一とならない規模較差は、各地社会において何の意味ももたなかつたのであろうか。

拙論において、ある前方後円墳の後円部径を八等分した値(1区の大きさ)は単にその墳丘の平面形を律しただけではなく、直接的であれ間接的であれ他の墳丘の規模を決定する際の基準値にもなった可能性を論じた(倉林 1996)。発掘調査が行われた美和山古墳群を例にして、この点を再論してみよう。美和山1号墳の後に継続的に築造された2号墳、3号墳は円墳で、その径は各々34m強と36m強と報告されている。発掘調査の所見に基づいてこれらの円墳の大きさを改めて検討してみると、いずれも径36mに復元されるとみて差し支えない。問題はこの36mという値であるが、その由来は1号墳の後円部



第47図 美和山古墳群に認められる企画性

径を48mとみると説明可能である。1号墳の1区の大きさは6mで36mはその6倍、すなわち1号墳の後円部径の6／8⁽¹⁶⁾が2号墳及び3号墳の径とされたことになる(第47図の(2)・(3)参照)。2号墳及び3号墳は1号墳より順次遅れて築造されたと考えられることから、墳形において格下げされただけではなく墳丘規模を決定する基準値も規則的に縮小されたことになる⁽¹⁷⁾。

美和山1号墳と第四レヴェルで結ばれる日上天王山古墳は、6区型に復元され後円部径は32.4mであった。かりに、5区型の美和山1号墳が先に築造されたと考えた場合、その後円部径の6／8は36m、5／8は30mであることから先の原則には適合しない。つまり、区型のみならず美和山1号墳の墳丘規模が日上天王山古墳の規定要因にはならなかったことがわかる。一方、日上天王山古墳が美和山1号墳よりも先に築造されたと考えた場合、前者の後円部径は後者に及ばないことからそもそも規定要因たり得ず、諸要素を秉承しない築造契機を想定しなければならない。以上いずれの場合においても、少なくとも現状では埴輪祭祀は美和山集団によって秉承されたとみなせる点を看過してはならない⁽¹⁸⁾。また、日上天王山古墳から30kmほど西方に位置する川東車塚古墳は、墳長約59mに対して後円部径は約33mを測ったことから6区型に復元されるとみてよい。日上天王山古墳と川東車塚古墳の後円部径はほぼ同規模であるが、墳長において看過し難い較差が現れている。川東車塚古墳においても後円部径と墳長が「区」を介して整合的な関係にあるならば、この墳長較差が偶然に生じた可能性はかなり低いと言わざるを得ない。つまり、出土遺物による營造時期の検討と併せて、墳長較差を説明づける連鎖関係の探求が重要課題となるのである。

大半の区型認定すら困難な現状では、比較検討にも自ずと限界がある。しかしながら、先に整理した諸墳間の位置関係を念頭におきながら、すべからく分析対象としうる後円部径及び後円部径と墳長との関係に限って諸墳間の繋がりを追求することにより、一つあるいはいくつかの検討モデルを提示することは可能である。諸墳の位置関係が築造時に意図されたものであれ、あるいは集団成長に随伴した結果的産物であれ、少なくとも区型と後円部径較差は往時の集団関係の一端を反映しているのではないか、という点を作業仮説として確認しておきたい⁽¹⁹⁾。

美作地方における前方後円墳や前方後方墳の營造状況を評価するにあたっては、他の地方、とりわけ吉備の中核であった備前、備中の南部地方における政治勢力の動向を念頭に置くべきであろう。第46図に示したように、瀧川地区及び梶並川地区から吉備南部へ出るには吉野川を、加茂川地区からは吉井川を降るルートが近い。言うまでもなく前者の集団が後者を経由して備前、備中に至った可能性を否定しないが、両河川の合流地点に王子古墳群や月の輪古墳、釜の上古墳など大形の円墳が相次いで築造されたことはこの地に固有の政治勢力が形成されたことを物語っており(近藤 1960 : p374)、いずれの河川も輸送・交通の手段として重要な役割を担っていたと考えることによりこの点を最大限に評価しうる⁽²⁰⁾。一方で、香々美川地区や倭文川地区からは、吉井川地区を経由して畠川を週上し旭川流域に至るルートが近い。こちらの場合も他を経由した、あるいは他との協力関係のもとに往来がなされた可能性を否定しないが、畠川流域に諏訪神社裏古墳のほか円墳や方墳からなる古墳群が形成された点が示唆的である。

美作地方と吉備南部を結ぶ関係連鎖の抽出は今後に期するとして、ここでは両者の関係の一端を示唆する事例をあげておきたい。加茂川地区に所在する正仙塚古墳の埋葬施設が播磨産の竈山石製とされる組合せ式石棺であることは既にふれたが、その石材(あるいは半製品、製品)はどのようなルートで彼の地に運ばれたのであろうか。その可能性はほぼ二つに限られる。第一は、石材産出地から播磨の内陸部に向かい現在の姫新線沿いに西進するルートであるが、途中幾度となく時を越えることになり不可能と

は言わないまでも多大な困難を伴ったことは間違いない。第二は、舟運である。すなわち、瀬戸内海を西進して吉井川の河口に至りこれを通上するルートであるが、搬送の効率を勘案すればこちらの可能性が高い。また、第二の可能性は、「月の輪地域」における集団の成長と政治的統一を説明づける点でも評価される。実際資料に即して言えば、吉井川の河口にはほど近い東岸には2~3期頃の築造と思われる花光寺山古墳が所在しており、埋葬施設が組合せ式の石棺である点が注目される(梅原 1937)。その石材は不明であり、蓋石には縄掛け突起が作出され副室が設けられるなど正仙塚古墳の石棺との違いは明らかであるが、いずれも吉備の首長墳における石棺使用の嚆矢とみなせる点において、型式が定まらなかった初期段階の政治的状況が反映されている可能性は否定できない。花光寺山古墳に近在し4期頃に比定される鶴山丸山古墳では、竪穴式石棺の中に蓋部、身部各一からなる長大な削抜き式の石棺が納められており(梅原 1938b)、「月の輪以前」の備前南部における石棺使用の先進性を窺わせる。加茂川地区の首長が遠隔地に産する石材で作られた石棺を用いることができたのは、少なくとも吉備の内においては吉井川河口付近、及び「月の輪地域」の首長層とその集団員の協力関係が得られたからであり、またこれを前提とした上での営みであったと言える。

4. 今後の展望にかえて

首長墳の分布状況がほぼ明らかにされた段階においては、それらが表象する関係を如何なる観点から捉え意味づけるかが重要な課題となる。その道筋は、おおよそ次のように整理される。

第一に、個々の情報が正しく把握されねばならない。現地踏査、墳丘測量調査、発掘調査など手段に応じて得られる情報にも様々なレヴェルが存在するが、以下に述べる二点と相俟って不斷に繰り返されるべき営みと言える。第二に、第一の作業を通して明らかにされた点をふまえ、同じ要素あるいは同じ観点から諸墳の繋がりを仮説的に引き出す。その際には、動産としての副葬品と不動産的側面をもつ墳丘⁽²¹⁾の各々に着目し、引き出された繋がりの整合性を検証する姿勢が望まれる⁽²²⁾。しかしながら、個々の首長墳は、このような観点から明らかにされた線的繋がりにおいてのみ意味づけられるわけではない。一定の時空の中で認識される政治勢力は、逆説的ではあるが、ある意味ではこのような繋がりの根幹をなす集団像としてイメージされるから、時に系列的な諸墳を包括して捉えるような領域指定も欠かせない。これが第三のポイントである。

各々の観点から、むしろこれらが組合わさった作業仮説が提示されることにより、さらに探求すべき問題点が明らかになる。例えば、諸要素における編年觀の矛盾、墳丘測量に基づく検討の限界、仮説的な系列に基づく領域と実際地理空間との不一致、などである。このような問題点と新たな知見をふまえた上で、既存の説明モデルに修正を加えるあるいは根本的に組立て直す、という営みを意識的かつ継続的に行う必要がある。また、この説明モデルの中に前方部をもたない大形墳を含めなければならないことは、美作地方における月の輪古墳の位置づけをみても明らかである。美作地方の場合は、山間地を連ねたヨコの関係と河川ルートに依存したタテの関係の双方に注目してこそ、前方後円墳秩序の基層構造に迫りうる検討モデルを組立てうると考える。

本論は、科学研究費補助金基盤研究(C)・一般「美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究」(1995~1996年度)の研究成果の一部を含む。

近藤義郎先生には、本調査への参加に便宜をはかっていただいたばかりではなく、様々な機会に多くの教示並びに指導をいただいた。また、発掘調査団、津山弥生の里文化財センターの諸氏には調査期間のみならず、本報告書の刊行に至るまで多方面にわたって協力をいただいた。特に、津山弥生の里文化財センターの中山俊紀、安川豊史の両氏には、大雪に見舞われた悪天候にも関わらず事前の周辺地踏査に同道いただいた。津山郷土博物館の濱哲夫氏には、岡高塚古墳関連遺物の調査研究に便宜をはかっていただいたほか、美作地方の諸墳について教示をいただいた。また、共に調査に携わった澤田秀実氏には以後の調査研究活動にも協力していただき、その成果の一端は本論をまとめるにあたり欠かせないものとなった。津山弥生の里文化財センター、津山郷土博物館、東京大学文学部考古学研究室には文献閲覧に便宜をはかっていただき、また東京都立大学人文学部考古学研究室には整理作業を円滑に進めるための場を提供していただいた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

(倉林眞砂斗)

註

- (1) 墳墳の編年觀に関しては、基本的に(近藤編 1991)に従い、墳丘規模に関する特に言及しない限りこれに準ずる。
- (2) 美作地方の前期前方後円(方)墳に関しては、近藤義郎、今井堯、土居徹、渡辺健治、安川豊史(ほか津山市教育委員会)、切引友子の諸氏による調査研究活動をもとに(近藤編 1991)の集成がなされ55基を数えた。その後、倉林眞砂斗を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(C)一般「美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究」(1995・1996年度)、澤田秀実の科学研究費補助金奨励研究(A)「前方後円墳築造企画の型式学的研究」(1995年度)及び東京都立大学特別研究費若手研究「前方後円墳築造企画の型式学的研究—古墳時代前期の政治的関係の抽出ー」(1995年度)などによる研究活動の一環として現地踏査、測量調査、発掘調査を実施し現在も継続中である。その中で、勝田郡勝央町に所在する西ノ宮古墳が前方後方墳である可能性が浮上した(倉林他 1996)ため、1996年12月に墳丘測量調査を行い推定墳長40m前後の前方後方墳であることを確認した。
- (3) 発掘調査が行われた日上天王山古墳、赤崎古墳、川東車塚古墳などでは二重口縁壺形土器の使用は確認されたものの埴輪は出土しておらず、現在のところ美作地方における埴輪の本格的な使用は月の輪古墳の築造以降ではないかと推察される。そこで、本論ではこれより前の段階を指して「月の輪以前」という用語を便宜的に用いることにする。第45図には、埴丘形態や、埴輪が採集されていない、いわゆる帆立貝形ではない、などの諸点を勘案して「月の輪以前」に築造された可能性を多少なりともつ例を含めてある。
- (4) 久米三成4号墳は月の輪古墳に遅れる6期墳の营造と考えられており、これはまた2基の方墳が接続したものであるとする見解もみられる(安川 1991)。「前方部」に連なる「後方部」斜面にも葺石が認められた点、「後方部」が著しく削平されたとはみなしづらいにも関わらず「前方部」との比高がほとんどない点、などが注意される。なお、津山弥生の里文化財センターの小郷利幸氏に、1997年3月現在調査中の田畠丸山2分墳が前方後方墳である可能性が高いことを教示いただいた。
- (5) 今井堯は、西ノ宮古墳を除くこれらの前方後方墳の呼称、出土遺物及び調査の経緯などを整理し、併せて美作における前方後方墳の研究歴をまとめている(今井 1987)。
- (6) 註(2)で述べた調査研究活動の一環として1996年12月に美野高塚古墳の墳丘測量調査を実施した際に、西側のくびれ部付近で3点の円筒埴輪片を探集した。詳細は、機会を改めて報告することにしたい。
- (7) 琴平山古墳は、墳丘の外形的特徴や出土土器などから「古式古墳」として認識されている(今井他 1963)。琴平山古墳の葺石には円錐が用いられたようである。また、継塚古墳では壺形土器ないし壺形埴輪を伴うことが指

描かれている([例])。

- (8) 1号墳から順次南に墓造されたことになるが、3号墳の南側にはさらに4号墳、5号墳が存在したことが知られている(高畠他 1978)。4号墳の推定径は16.5mで、円錐で葺石が施されていたようである。また、明らかに3号墳に後出する円筒埴輪が出土しており、美和山古墳群における埴輪祭祀の持続性が注目される。
- (9) 近年、津山弥生の里文化財センターの安川豊史、行田裕美の奥氏が中心となって墳丘の測量調査が実施されており、格別の配慮を得て墳丘測量図を拝見させていただいた。
- ⑩ 諏訪神社裏古墳は8基からなる古墳群の一つで、同郡の円墳である諏訪神社古墳からは倭製獣形鏡の破片が出土している(濱 1990)。
- ⑪ 濱哲夫は、奥の前1号墳から出土した倭製の内行花文鏡は型式的にみて月の輪古墳、土居妙見山古墳、竹田9号墳からの出土例に先行したと考えられることから、その築造時期を前二期後半ないし前三期と推測している(濱 1990)。
- ⑫ 註(2)述べた調査研究活動の一環として落合町教育委員会の助力を得て1996年3月に発掘調査を実施した結果、川東車塚古墳は墳長約59m、後円部径約33mを測り円錐の葺石を伴うことが判明した(近藤他 1996c)。中重心葬は排水施設を伴う粘土床(粘土壠)の可能性があるで、その断面の形状から割竹形木棺が用いられたと考えられる。墳丘、特にくびれ部からは二重口縁獣形土器の破片が多数出土した一方で、埴輪は見当たらなかった。
- ⑬ ●は位置関係を示すラインの末端に位置することを、○は何らかの形でその経由点に位置することを示す。
- ⑭ 調査時の所見について、担当者であった津山弥生の里文化財センターの中山後紀氏に多くの教示をいただいた。
- ⑮ 第3図の(1)は報告書(中山 1992)のFig.13を、(2)及び(3)はFig.17に加筆・一部改変して作成した。
- ⑯ 1号墳の後円部径に等しい8区分の長さから2区分が減じられ6区分とされたことを明示するために約分は行わない。
- ⑰ 美和山2号墳、3号墳とほぼ同規模である田邑丸山1号墳の位置づけに関しても同様の観点からの検討が必要である。
- ⑱ 津山市街地北西部の丘陵上に所在する下道山南古墳は一辺約15mの方墳で、笠甲の形象埴輪や円筒埴輪が出土している(岡本 1977)。円筒埴輪は、日上帆山51号、52号墳及び井ノ口車塚古墳から出土したものよりは月の輪古墳に類似し、突宍は月の輪古墳例よりもしっかり作られているとされる(岡本 1977: p79)。下道山南古墳と美和山古墳群は吉井川と横野川に画される一連の沖積地を臨んでおり、両者は4kmほどしか離れていない。したがって、下道山南側まで時期を降らせてみると埴輪祭祀の地域的偏りは一層明白となる。
- ⑲ 淀川地区が前方後方墳の集中的墓造によって特徴づけられることは確かであるが、墳形に現れた画一性を過大評価してはならないであろう。これらの前方後方墳に関しては、相互の比較検討と併せて前方後円墳との関係を探求した上で評価することが望ましい。前方後方墳の場合は後方部対角長が平面企画の基準値とされたと考えられ、この点から前方後円墳との関係連鎖を指定することが可能である(倉林 1995)。美作地方の前方後方墳に関しては、さしあなって墳丘測量図に基づいた比較検討を行なう予定である。
- ⑳ 今井亮は、陪葬者の社会的位置づけをふまえつつ首長権の構造的特質を論じる中で、月の輪古墳の造出しにおける埋葬を取り上げた(今井 1988)。その中で造出し埋葬の棺上に置かれた舟形土製品に注目し、墳丘中心に並葬された首長並びにその補佐者に從属し吉井川及び吉野川の河川交通・運輸の管理を任せられた被葬者像を想定する。また、近藤義郎は「月の輪地域」における政治的統一の再評価という観点から河川輸送・河川交通の重要性を指摘し、月の輪古墳造出しの被葬者に関しては同様の人物像を想定する(近藤 1994)。
- ㉑ この場合は、埋葬施設その他諸施設を含む広義の墳丘を指す。

22 (澤田 1993)ではこのような観点からの検討が意識的に展開されており、その点において評価される。

引用・参考文献

- 石部正志他 1979 「鏡内大形前方後円墳の墓造企画について」『古代学研究』第89号 古代学研究会
- 今井 勇 1984 「竹田丘陵の遺跡」「竹田墳墓群」竹田遺跡発掘調査報告第1集 鏡野町教育委員会
- 今井 勇 1987 「美作の前方後方墳四題」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会
- 今井 勇 1988 「古墳における古墳被葬者の検討」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- 今井 勇・渡辺健治 1963 「美作勝央町琴平山古墳」『古代吉備』第5集 古代吉備研究会
- 梅原来治 1937 「備前行幸村花光寺山古墳」「近畿地方古墳墓の調査 上野国花社二子山古墳の調査」日本古文化研究所報告第4 日本古文化研究所
- 梅原来治 1938a 「美作郡村観音山古墳」「近畿地方古墳墓の調査3」日本古文化研究所報告第9 日本古文化研究所
- 梅原来治 1938b 「備前和気郡鶴山丸山古墳」「近畿地方古墳墓の調査3」日本古文化研究所報告第9 日本古文化研究所
- 岡本寛久 1977 「第4章「下道山南古墳」「下道山遺跡緊急発掘調査概報」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(17) 岡山県文化財保護協会
- 小郷利幸 1992 「近長丸山古墳群」津市埋蔵文化財発掘調査報告第41集 津市教育委員会
- 小郷利幸 1994 「井口車塚古墳」津市埋蔵文化財発掘調査報告第52集 津市教育委員会
- 小郷利幸 1996 「大野木塚古墳丘測量調査報告」「年報 津山弥生の里」第3号(平成6年度) 津山弥生の里文化財センター
- 尾上元規 1995 「7・十六夜山古墳闇遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告」25 岡山県教育委員会
- 金田善敬 1996 「20 縣立津山高校校舎改築に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財報告」26 岡山県教育委員会
- 倉林眞砂斗 1995 「墳形の違い」「国府台」第6号 和洋女子大学文化資料館
- 倉林眞砂斗 1996 「房総における前方後円墳秩序」「国府台」第7号 和洋女子大学文化資料館
- 倉林眞砂斗・澤田秀実 1996 「美作における前方後方墳の測量調査」「中西研だより」第3号 中国四国前方後円墳研究会
- 河本 清 1988 「美作町植原寺山古墳出土の土師器について」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会
- 河本 清・柳瀬雅彦 1979 「久米三成4号墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(30) 岡山県教育委員会
- 近藤義郎 1960 「第4部 年代と性格 第2章 地域集団としての月の輪地域の成立と発展」「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会
- 近藤義郎 1985 「第11章 古墳とはにか」『日本考古学研究序説』 岩波書店
- 近藤義郎 1986a 「赤崎古墳」「岡山県史」第18卷 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1986b 「植原寺山古墳」「岡山県史」第18卷 考古資料 岡山県
- 近藤義郎 1994 「月の輪地域の政治的統一」再考」『古代吉備』第16集 古代吉備研究会
- 近藤義郎編 1991 「前方後円墳集成」中国・四国編 山川出版社
- 近藤義郎他 1996 「川東車塚古墳の発掘調査」「中西研だより」第4号 中国四国前方後円墳研究会
- 澤田秀実 1991 「墳丘形態からみた椎現山51・50号墳」「椎現山51号墳—兵庫県揖保郡御津町」「椎現山51号墳」刊行会
- 澤田秀実 1993 「前方後円墳の成立過程」『研究紀要』XII 東京都埋蔵文化財センター

- 高畠知功他 1978 「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(28) 岡山県教育委員会
- 土居 徹 1969 「美作鏡野町土居妙見山古墳」「古代吉備」第6集 古代吉備研究会
- 土居 徹 1975 「第3章 資料報告 2 田色丸山古墳群」「津山市文化財年報」1 津山市教育委員会
- 土居 徹 1986 「郷親音山古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 中山俊紀 1992 「史跡美和山古墳群保存整備事業報告書」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集 津山市教育委員会
- 古市秀治 1995 「第9編 我校の文化財 第2章 十六夜山古墳」「津山高校百年史」下巻 岡山県立津山高等学校同窓会
- 北條芳謙 1986 「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」「考古学研究」第32巻第4号 考古学研究会
- 間壁忠彦・間壁淑子 1975 「長持形石棺」「倉敷考古館研究集録」第11号 倉敷考古館
- 光永真一 1986 「植月寺山古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県
- 濱 哲夫 1990 「美作の鏡と古墳」津山郷土博物館特別展図録第3番 津山郷土博物館
- 保田義治 1989 「茶山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集 津山市教育委員会
- 安川豊史 1991 「美作」「前方後円墳集成」中畠・四国編（近藤義郎編） 山川出版社
- 安川豊史・坂本心平 1996 「正仙塚古墳測量調査報告」「午報「津山弥生の里」第3号（平成6年度） 津山弥生の里文化財センター
- 和田晴吾 1981 「向日市五塚原古墳の測量調査より」「王陵の比較研究」（小野山節編） 京都大学文学部考古学研究室

第5章 むすび — 日上天王山古墳と美作東部諸首長の動向 —

I 築造時期について

日上天王山古墳が築造された年代つまり考古学でいう時期について、主に次の四つの要素から考えていこう。1は墳丘、2は埋葬施設、3は副葬品、4は伴出の土器である。

1. 墳丘

墳長56.9mの前方後円墳である。規模はかならずしも時期を決める材料にならないので、ここでは墳形を問題にする。まず前方部頂に較べて後円部頂が際立って高い。これは古式前方後円墳の特徴である。次に前方部が前面に向かって摺形に拡がっている点である。これは古式のうちでも古いほうの前方後円(方)墳の特徴の一つである。ここでいう「古式」は後に述べる「前期」とほぼ同じ内容である。第4章第1節で澤田秀実は、本墳について最古型式の前方後円墳と考えられる奈良県桜井市箸墓古墳や最古型式に近い岡山市浦間茶臼山古墳と墳形比較を行っているが、三者の形態はよく似ている。しかし摺形型式の前方部には若干の変異があり、また一定期間持続していたとみられるので、日上天王山古墳を直ちに最古型式前方後円墳とは決し難い。あえて言えば、前方後円墳(以下特別な場合を除き前方後方墳を含める)を10期に区分した場合の1期後半に属するとみたい。なおここでは1期前半を最古型式とし、後半を含め最古群と呼ぶこととする。また10期区分のうち1期~4期を前期または古式、5期~7期を中期、8期~10期を後期とここでは仮称する。

2. 埋葬施設

日上天王山古墳には後円部頂だけで(前方部頂は発掘していない)埋葬施設が四つある。そのうち最初に作られたのは中心埋葬なので、それが築造時期を考える手掛かりとなるかもしれない。その埋葬施設は木棺と堅穴式石槨(排水施設を含む)とからなる。木棺は遺体を直接に収めるもので、石槨は棺を覆い保護する施設である。日上天王山古墳の場合もそうであるが木棺は腐って無くなっているので、規模や構造は一般には石槨で考えることになる。日上天王山古墳の中心石槨の内法の長さは4.21mで、ずいぶん長いものである。これは痕跡から約3.9mと推定された木棺の長さを反映している。もちろん遺体一人用である。このような長い石槨は、最古型式のものを含めて前期の埋葬の特徴の一つであるが、中期の古墳にもしばしば見られる。例えば10期区分で4期後半ないし5期初頭とみられる月の輪古墳の中央棺の長さは約5.65mである。石槨の形や構造からの時期比定もかなり難しい。第4章第4節で倉林真砂斗がくわしく論じているが、石槨の幅の広狭も、棺の形と関係する槨の底部の構造も、蓋石上の被覆形態も、棺槨の方位も、時期を限定する材料には必ずしもならない。したがって埋葬施設からみると、日上天王山古墳は前期と呼べる程度である。

3. 副葬品

残念なことに中心埋葬が乱掘に遇い、石槨内から副葬品の重要な部分が取り出されたと推定されるので、副葬品からの時期限定も甚だ困難である。ようやく僕達が発見できた副葬品は、第3章第3節で見るように刀・鎌・刀子・鉈・斧・鎧先と思われる品といった鉄製品と方1cmほどのごく薄い青銅鏡

片3点である。鉄製品を大きく括ると、(a)武器、(b)農具・工具などの生産用具となる。最古群前方後円墳の副葬品の主な組合せは、中国鏡・武器・生産用具の三者であるが、もし3点の青銅破片が中国鏡の残片を示すと仮定するならば(おそらくそうであろうが)、副葬品の組合せは日上天王山古墳を最古群前方後円墳と考えることと矛盾しない。しかも最古群前方後円墳にはしばしば玉類が見られず、日上天王山古墳中心埋葬にも玉類は見られなかった。このように残存した副葬品にはこの古墳が最古群であることを否定する材料は認められない。第2埋葬の副葬品については第3章第3節で水野敏典が詳しく述べているが、その埋葬施設は中心埋葬の後に作られているので、ここでは触れない。

4. 土器

日上天王山古墳では東側くびれ部で墳丘築造時または直後に置かれたと考えられる土器片一括が出土している。中山後紀が第3章第3節Ⅲと第4章第5節で詳細に述べているように、それは途中に段がつき外方に張り出した口縁をもつ、いわゆる二重口縁の壺形土器である。類例は奈良県桜井市茶臼山古墳⁽¹⁾、先に壺形前方部の例として挙げた桜井市箸墓古墳⁽²⁾、38面の中国鏡を出土し古式前方後円墳の代表例とされた京都府山城町椿井大塚山古墳⁽³⁾などで知られている。中国鏡13面が発見されこれまた古式前方後方墳とされた岡山市湯迫の櫛前車塚古墳にも、小破片のため確定しがたいが、類例が知られている⁽⁴⁾。日上天王山古墳の二重口縁の壺形土器がこれらの仲間であることはほぼ確かである。しかし二重口縁の壺形土器にも2期に下る形態が知られているので、それを伴う古墳が前期前業であることは確かであるにしても、直ちに最古群の前方後円墳と見做すことはできない。その点日上天王山古墳出土の二重口縁壺形土器は形態からみて2期に下るとは考え難い。

ついで述べると、桜井市箸墓古墳の後円部頂からこれら二重口縁壺形土器よりも明らかに古い型式の宮山型特殊器台と呼ばれる土器が発見されており⁽⁵⁾、上記したその他古墳よりもその点で最古型式(1期前半)の前方後円墳としてやや早く築造されたとみてよい⁽⁶⁾。青備でいうと、同じ宮山型特殊器台・特殊壺を出土した総社市三輪の宮山古墳⁽⁷⁾、やや異なるが宮山型と同時期とみられる特殊器台・特殊壺を出土した岡山市花尻の矢藤治山古墳⁽⁸⁾が最古型式前方後円墳となる。奈良県では宮山型特殊器台を出土した前方後円墳など大形古墳は他に3基余り知られている⁽⁹⁾。

このように日上天王山古墳出土の二重口縁壺形土器は、通常1期後半の古墳に伴う型式の範間にに入ると考えられる⁽¹⁰⁾。宮山型特殊器台・特殊壺を出土する前方後円墳は美作では知られていないので、「美作における」という限定をつければ日上天王山古墳を最古型式前方後円墳と呼んでもよい。それは、墳形、棺槨、副葬品の組合せなどの年代観と矛盾することなく、むしろそれを支持していると考えられる。

II. 日上天王山古墳をめぐる情勢

1. 美作東部の首長達

i. 五つの政治圏

日上天王山古墳は墳長56.9mを測る大きな前方後円墳であるが、前方後円墳時代前期に美作東部一帯に君臨した大首長の墓であるとはいひ難い。当時、美作東部はいまでもなく美作全域も吉備全域も、政治的「まとまり」ともいいくべき幾つもの地域に分かれており、それぞれの「まとまり」ごとに統率す

る首長がいて勢力を競うように大小の前方後円墳、前方後方墳、大形円墳を築造していたのである。この「まとまり」をここでは『政治圏』と呼ぶことにしたい。

前方後円墳・前方後方墳・大形円墳の分布からみると、美作東部は南から(1)吉井川・吉野川の合流点付近(およそ櫛原町・吉井町・英田町)を中心とする政治圏(以下図と呼ぶ)、(2)吉野川を通りその東流の梶並川下流域(およそ美作町)を中心とする圏、(3)西流の滝川下流域(およそ勝央町南部)を中心とする圏、(4)滝川中流域(およそ勝央町北部)を中心とする圏、(5)吉井川と加茂川との合流点から北東地域(およそ津市北東部)の圏などに区分できる⁽¹⁾。もっとも櫛並川上流域(およそ勝田町)がある時期には(2)と分離していたかもしれないし、また那岐山麓の開折扇状地(およそ勝北町・奈義町)にも今後政治圏が認められるかもしれない。しかしここでは研究の現状を踏まえて5圏として話を進めたい。

これら各圏では前方後円墳時代前期に、数基ずつの前方後円墳または前方後方墳あるいは大形円墳が築造された。その詳細については第4章第6節で倉林真砂斗が述べているが、うち最大の古墳は(4)圏の墳長約91.5mの植月寺山古墳で、次に大きい墳長約67mの美野高塚古墳も(4)圏に属する。その他20基弱の前方後円墳・前方後方墳の大部分は墳長40数m~50数mである。そのうち日上天王山古墳(墳長56.9m、前方後円墳)に匹敵する古墳を挙げると、(2)圏の櫛原寺山古墳(墳長50~55m、前方後方墳)、(3)圏の岡高塚古墳(墳長約55m、前方後方墳)、(4)圏の美野中塚古墳(墳長約55m、前方後方墳)、(5)圏の正仙塚古墳(墳長約55.5m、前方後円墳)で、第3の規模をもつグループである。

II. 「どんぐりの背くらべ」

この5基は、墳長だけでなく、後円・後方の違いはあるが墳形とくに前方部の形の点でも、埴輪がない点でもよく似ている。だからといって同時または同時につくられたとは考えがたく、(4)圏では美野中塚古墳が上記した植月寺山古墳と初現を競い合い、(5)圏では日上天王山古墳と正仙塚古墳とが競い合う。いま直ちにそれらの前後関係を決定するにはやや材料不足であるが、推測を交えてあえて述べれば、(4)圏では明らかな撮形前方部の形状からみて初現の古墳は植月寺山古墳、(5)圏では組合せ式石棺を埋葬施設とする正仙塚古墳に先立つ初現の古墳は日上天王山古墳とみられ、(3)圏では撮形前方部をもつ岡高塚古墳が、(2)圏では櫛原寺山古墳が、(1)圏では櫛原町玉子中墳または上墳が初現の有力候補となる。

以上のような次第からすれば日上天王山古墳に葬られた主人公は、美作に前方後円墳築造の風が及んだ初期に(おそらく1期の内に)吉井川・加茂川合流点の北東地域つまり(5)圏を基盤とする勢力の頂点に立った人物であると考えてよい。彼を含む美作東部の幾つかの政治圏の首長達はその時期、その間に勢力の多少の強弱と推移⁽¹⁾はあるても互いに競合しつつ、あるいは争いあるいは結束して併存していた、あえていえば「どんぐりの背くらべ」の状況にあった、と考えられる。

2. 各政治圏の墳形の特色

i. 前方後円墳と前方後方墳と大形円墳

これら5圏の初現ないし初現候補の古墳の形状をあらためてみると、(1)圏では大形円墳、(2)(3)(4)各圏では前方後方墳、(5)圏では前方後円墳と、一定していない。前方後円墳と前方後方墳との間の格差は、地域を広くとれば、例えば大和や吉備といった地域では明らかで、前方後円墳の優位は動かない。

しかし美作東部では、すでにみたように最大の古墳は(4)圏の前方後方墳の植月寺山古墳であり、次





- (1) 圖 1 王子上墳 2 王子中墳 3 王子下墳 4 月の輪古墳 5 錐の上古墳 6 伊勢山古墳
- (2) 圖 1 橋原寺山古墳 2 観音堂古墳 3 上経塚2号墳 4 緑青塚古墳 5 金焼山古墳
- (3) 圖 1 岡高塚古墳 2 幸平山古墳 3 殿塚古墳 4 よつみ丸古墳 5 鍛冶屋崎古墳 6 上相中塚古墳 7 上相東塚古墳 8 愛宕山古墳
- (4) 圖 1 横月寺山古墳 2 美野中塚古墳 3 西ノ宮古墳 4 田井高塚古墳 5 美野高塚古墳
- (5) 圖 1 日上天王山古墳 2 正仙塚古墳 3 近長四ツ塚2号墳 4 七ウ田1号墳 5 一貫東古墳 6 茶山古墳 7 玉琳大塚古墳 8 紙山80号墳

第48図 美作東部5政治圏の大形古墳の分布
国土地理院50,000分の1地形図「津山東部」を縮小使用
(縮尺約65,000分の1)

に大きい美野高塚も前方後方墳で(4)図に築造され、またその(4)図では5基の大形古墳のすべてが前方後方墳である。こうしてみると、美作東部にあって(4)図は異色といえる。つまり(4)図は一貫して前方後方墳を築造しながら規模の優位も見せている。

それに対して(3)図は前方後方墳1基と前方後円墳5基(別に所属団不明ながらこの団の可能性が強い2基がある)、(2)図は前方後方墳1基と前方後円墳3基(北方にかなり離れているが同水系の真加部観音堂古墳を入れれば4基)、(1)図は王子の少なくとも2墳・月の輪古墳・釜の上古墳・伊勢山古墳と一貫して円墳である。わが日上天王山古墳の(5)図では知られている8基すべてが前方後円墳である。こうしてみると、(1)図も(5)図も相当に異色である。(1)図は一貫して円墳を築造し、やや小さい伊勢山古墳と墳形がかならずしも定かでない王子下墳を除くと、円墳の径は大きく、とくに月の輪古墳や釜の上古墳では径60m前後もある。これは美作東部最大の櫛月寺山古墳の後方部の一辺よりかなり大きい。(5)図は一貫して前方後円墳を築造している。ということになると、(2)図(3)図も前方後方墳1基で他は前方後円墳という点で異色といえまいえないこともない。つまり美作東部は政治団ごとに継続して築かれた大形古墳の形に差をもち、それぞれ「個性的」でさえある。

しかしそれは各政治団が自分で決めた「個性」というより、当時の最大の政治勢力であった大和勢力との関係で決められたと考えるべきであろう。もっとも吉備中枢の勢力がその間に介在していたことは充分ありえただろう。

ii. 美作東部最初の前方後円墳は日上天王山古墳

古墳の代表かつ典型が前方後円墳であることは早くからよく知られ、前方後円墳体制や前方後円墳秩序という表現もそこから生まれてきた。つまり前方後円墳→前方後方墳→円墳・方墳の墓制の附属性化である。その意味で古墳が造られた時代は、単に古墳時代とするよりも前方後円墳時代と呼んだほうが相応しい。つまり前方後円墳を頂点とする墓制が政治秩序のもっとも重要な表現であったからである⁽¹⁹⁾。すると、一貫して前方後円墳の築造を続けた(5)図の首長達が大和勢力からもっとも重視されていた可能性が高い。

墳形以外の要素、墳丘の規模・埴輪の樹立・埋葬施設の構造・副葬品の種類と量などがどのような基準あるいは規制の内にあったかは議論のあるところであろうが、大和勢力との関係以外の要素、例えば介在する勢力ここでは吉備中枢の勢力の動向、また各政治団の首長勢力自体の力量やその消長も関係した可能性が強い。(4)図の古墳が墳形としては一貫して前方後方形をとりながら、規模の大形さをある期間保持したことの背景もこのようにして理解できるのではないかろうか。

この意見が認められるならば日上天王山古墳の主は、美作東部において大和勢力から最も重要視された政治団において最初に前方後円墳の築造を認められた首長ということになる。

3. 埋葬施設の差異

i. 壴穴式石槨4例

墳丘の形態からみた日上天王山古墳は上記のようであるが、埋葬施設はどうであろうか。しかし埋葬施設の調査が何ほどかでもなされたことのある前期の前方後円墳・前方後方墳・大形円墳は美作東部においてはきわめて少なく、計5、6基にすぎない。そのうち日上天王山古墳のものと比較できそうな墴穴式石槨は、(1)図の王子中墳、(2)図の櫛原寺山古墳、(3)図の高塚古墳の3基である。いま副葬品を含めその概略を列挙しよう。

王子中墳は径約40mの大形円墳で、石榔は長さ約3.4m、幅約1.4m、高さ約1.3m余の割り石積み、床面は平らで箱形の木棺が想定される。明治の乱撫の際、刀の破片と中國鏡(円座鉢半肉彫獸帶鏡)とが出土したという。いま東京大学総合研究資料館に保管されている鏡がそれという。また墳頂からガラス小玉数個が採集されている。

柄原寺山古墳は墳長50～55m(略測)の前方後方墳で、石榔は偏平な粘板岩の横積みで、長さ約3.8m、幅約0.85m、高さ約0.85～0.9m、床面はゆるいカーヴをもち割竹形木棺が想定される。副葬品として倭鏡(半円方形帶四獸鏡)・刀・劍・鎌・鍔・斧・勾玉・甕などが知られている。そのうち妻は前方後円墳時代1期末か2期とみられる⁽¹⁴⁾。

岡高塚古墳の石榔は山石の割り石積みで、長さ4.88m、幅約0.95～0.85m、高さ約0.9m、柄原寺山古墳と同様割竹形木棺が想定される。副葬品として倭製とされる四獸鏡・劍・細身の筒形銅器が知られている。

それに対して日上天王山古墳の中心石榔は、最下部に置かれた円鏗(丸石)を除くと尼子石と呼ばれる付近の山の溶結凝灰岩の割り石を横長に積み、長さ4.21m、幅約0.92～約1.10m、高さ約1.0m、床面はほぼ平坦で箱形木棺が置かれたとみられる。副葬品については先にみた。

ii. 日上天王山古墳の石榔

これらのうち、王子中墳の石榔は長さに対し幅が広く丈も高く、箱形木棺を思わせる平坦な床面をもち、中國製の中形鏡の副葬も想定され他と相當に異なる性格の古墳と思われる。その他の3基の石榔は、岡高塚古墳のそれがやや長い点を除くと、幅・高さ・壁体の構造とも大差なく、むしろよく似ているといってよい。その限りでは先に1で述べた「競合」状況と矛盾することはない。ただ他の2基の石榔が割竹形と考えられる木棺を収めているのに対し、日上天王山古墳の石榔が収める木棺は箱形と推定される。

割竹形木棺と箱形木棺とに格差があるかどうかは厳密には不明というほかないが、大形・中形の前期古墳では割竹形木棺が通例である。したがって日上天王山古墳の木棺が確かに箱形であるとすると、一貫して前方後円墳を築造した政治團の最初の前方後円墳の主であったにもかかわらず、何故か割竹形木棺に葬られなかったことは、棺の形態・構造の基準ないし規制が墳形とは別な原理によるものであることを思わせる。

4. 月の輪古墳の出現と日上天王山古墳

i. 吉井吉野の水路の「和平的利用」

以上述べた美作東部の諸首長勢力はこの時期に美作に孤立していたわけではない。陸路を東にとり播磨に至る道もあるが、強いつながりは吉井吉野の両河川水路(あるいは一部川沿いに開かれた路)による備前とのそれを抜いて他にない。おそらく山地の関道はいちじるしく困難であったろう。もっとも美作中部西部を経て旭川を上下する水路も考えられるが、それは美作西部の首長勢力の下にあったと考えるのが自然であろう。とすれば東部の首長達のうち(1)団と(5)団の首長は吉井川を航行し、他は(宍川? 梶並川?)吉野川、統いて吉井川を上下して人員と物資を運んだに違いない⁽¹⁵⁾。吉井川下流域には邑久の平野、上道の平野が拡がり、墳長約140mの岡山市浦間茶臼山古墳をはじめ前期の大形前方後円墳が築造され、それらが示す大首長は生窓などの津を基地とし瀬戸内航路によって近畿中枢その他各地と関係をもっていたにちがいない。

美作東部の首長勢力の間に甚だしい格差があり優勢な首長がこれら河川航路を独占的ないし優位的に利用していたとするならば、それは当然大形古墳の墳丘規模その他に反映するはずである。すでにみたように墳丘規模では(4)団が優勢で、とくに植月寺山古墳と美野高塚古墳は美作東部1位2位を占めるが、実はこの(4)団は吉野川支流の瀧川の中流域で、舟運路としてはもっとも不利不便な位置にある。当時どのような条件が加わっていたかは察し難いが、この点だけを取り上げて考えるなら、河川交通における独占的あるいは優位の利用はほとんどなかった蓋然性が高い。各首長勢力は競合的ではあっても「平和的」に吉井吉野の水路を利用して備前の勢力、さらに察するにより大きな東方の勢力との関係を保持していたものと思われる。

ii. (1) 圏における月の輪・釜の上の拍頭

前方後円墳時代4期末ないし5期初頭に大きな変化が訪れる。(1)団における月の輪古墳・釜の上古墳の二つの大形円墳の墓造であり、それが示すその地の首長勢力の急速な進展である。前方後円墳秩序の中では一般に前方後円墳や前方後方墳のほうが円墳より上位にあることは明らかであるが、個々のそれを較べる場合、墳丘規模・埴輪などの外表施設・埋葬構造・副葬品などにおいてかならずもしもの通りでない場合があることもよく知られている。前方後円墳の播磨吉島古墳よりも前方後方墳の播磨椎現山51号墳のほうが規模が大きいが、石櫛では吉島古墳のほうが幅広く長い。また備前車塚古墳は前方後方墳であるが、前方後円墳の吉島古墳よりも多くの三角縁神獣鏡などの中国鏡が収められていた、というが如くである。こうした点については先に2.においても美作東部の事象に関連して触れた。

月の輪古墳は北に幅長さとも約10mの低い造出をもつ円墳であるが、円丘部の径は約60m、墳頂平坦部径約15×16m、高さ約10mである。これを美作東部の前方後円墳・前方後方墳と較べるとどうなるか。前方後円墳・前方後方墳の主要部分かつ主埋葬部が後円部であり後方部であることはいうまでもない。最大の植月寺山古墳の後方部の辺は41m強高さ約8.5m、次に大きい美野高塚古墳後方部の辺は約34m高さ約5m、わが日上天王山古墳の後円部は径32.4m、墳頂平坦部径約13m、高さ約6.4mである。厳密にはこれに成形のための土量、足場、立地などを考慮して総合的に検討しなければならないのだろうが、その場合でも月の輪古墳円丘部の優位は動かないと思われる。それに加えて月の輪古墳にはその広い斜面に推定8万個の葺石がふかれ、墳裾・段上・頂縁には推定総計およそ800本前後の円筒形埴輪と朝顔形埴輪が立てられ、墳頂には家形10個以上、楯形6個、轄形2個、甲形3個、蓋形5個などの形象埴輪群が所狭しとばかりに置かれていた。墳頂中央の木棺の推定長は5.65m、副葬品としては倭製鏡1面・勾玉管玉からなる頭飾り1連・刀劍16口・槍1口・矢箟5束・短甲1領・工具16丁が添えられていた。武器武具がとくに顯著で、形象埴輪での武器武具の優位に符合する。これらは全体として、その勢力を誇示する側面が顯著である。やや離れて築造された釜の上古墳は未発掘であるが墳丘の規模は月の輪古墳に優るとも劣らず、また頂から月の輪古墳出土品と相通する家形埴輪が採集されている。

iii. 月の輪以後の各団の凋落

月の輪古墳が築造されたのは4期末ないし5期初頭と考えられるが、この頃から以降になると、美作東部の各政治団では全体として古墳の様子が変わってくる。前方後円墳や前方後方墳が造られなくなったり小形化したりしてくる。月の輪古墳のある(1)団を除けばもちろん大形円墳も造られない。

(2)団では月の輪古墳と同時期とみられる前方後円墳は指摘されていないが、月の輪古墳以前の植月寺山古墳と桃並川上流の勝田町真加部・觀音堂古墳を除く3基のうち、楕円上・上経塚2号墳は時期不

明、平福・緑青塚古墳、植原中・金焼山古墳は月の輪古墳以後の前方後円墳とみられ、ともに墳長約36mである。この2基は7期または8期と推定されるが、以後の大形古墳は知られていない。

(3)団では岡・殿塚古墳と岡・琴平山古墳の2前方後円墳は月の輪古墳以前とみられ共に墳長約50m、そのほか時期不詳の岡・よつみ丘古墳(墳長約23m)、上相・鍛冶屋船古墳(墳長約24m)、植月中・愛宕山古墳(墳長約28m)があるが、いずれも小形である。またおそらく(3)団に属すると思われるが確かにない上相・中塚古墳と上相・東塚古墳は、前方部が短く時期不詳で小形、前者は墳長約21m、後者は墳長約24mである。このように、月の輪古墳以後の大形古墳は知られていない。

(4)団では5基の前方後方墳はすべて月の輪古墳以前とみられ、月の輪古墳の時期以降には少なくとも美野平野の周辺には前方後円墳・前方後方墳を含め大形古墳は認められていない。かつて美作東部最大の植月寺山古墳を生んだこの地域はその勢力をいちじるしく弱めたと考えられる。

(5)団、つまりわが日上天王山古墳の後裔はどうであろうか、吉井川と加茂川との合流点から加茂川流域にかけてのこの地域は、日上天王山古墳に統くとみられる墳長約55.5mの高野山西・正仙塚古墳、時期不詳の近長・四ツ塚2号墳(墳長約45m)と金井・一貫東古墳(墳長約31m)、河辺・セウ田1号墳(前方後円墳とすれば墳長約38m⁽¹⁶⁾)を除くと、明らかに月の輪古墳以後は瓜生原・茶山古墳(墳長約21m)、川崎・玉琳大塚古墳(墳長推定30~35m)、日上歛山80号墳(墳長約31m)で、依然前方後円形を保つ規模は小さくなる。これら3基は前方後円墳時代7期~9期と推定されるが、以後の前方後円墳は知られていない。

iv. 月の輪の主による舟運の優位的把握

このようにみてくると他の政治團の凋落を尻目に、前方後円墳時代4期末ないし5期初頭から墳丘を大形化させ勢威を増してくるのは(1)団だけであることが判明する。しかも月の輪古墳でみるかぎり墳丘規模だけでなく筒形埴輪・形象埴輪が盛行し、副葬品に武器が卓越してくる。この大形古墳の優位は、この時点でのこの地の首長勢力が吉井川・古野川の舟運を独占的に、少なくとも優位的に握るにいたったことを物語るものであろう。しかしそれにもかかわらず、方形造出しをもつとはいえ円墳の形を保持していることは、その地の首長の勢威が依然として大和勢力によって前方後円墳あるいは前方後方墳による埋葬に相応しいと見られていないことを示しているかのようである。しかし吉井・吉野の合流点に位置しているとはいえ、舟運の優位的把握がこの地の首長勢力だけの力によってなされたかどうかは一考を要する。

かつて月の輪古墳出土の埴輪の胎土(土質)の分析的研究を行なった岡本明郎は、その埴輪と備前南部の大形前方後円墳金藏山古墳(岡山市沢田の墳長165m)の埴輪とが密接な関係をもつことを突き止め、両者の関係を考えた⁽¹⁷⁾。それに加え山頂立地、墳丘の大形化、筒形埴輪の三段壇築、副葬品における武器と生産用具の卓越などの点、なかでも特に形象埴輪の種類・形や文様の特徴において月の輪古墳と金藏山古墳とは類似を示し、月の輪古墳・釜の上古墳の隆盛は備前南部の大首長勢力のもつ利害関係によって強く支えられていたことが推定できるようになった。

日上天王山古墳の主の後裔をはじめ、(1)団の北方に位置した諸首長勢力の凋落の原因の大きな一つは、以上のように推定される。しかしそれにもかかわらず、空白期間の有無はなお不明としても、少なくとも(2)団・(5)団において、小形前方後円墳の築造がある期間続けられたことは特筆に値する。

5. 日上天王山古墳と日上歛山古墳群

i. 犬山1号墳と犬山80号墳

なお日上天王山古墳の北方・西方に密集する犬山古墳群については、すでに壊滅した犬山80号墳を除き、これまで触れることがなかったが、日上天王山古墳と対局の位置にある北端の犬山1号墳と天王山古墳にはほど近い小形の35号墳が1996年に津市教育委員会によって発掘されたので、それを含め簡単に触れておこう⁽¹⁾。現存56基であるが、日上一帯に眼を抜け、さらには破壊され消失したものを考慮に入れると、犬山丘陵およびその西にかけてもと100基に近い小古墳が築かれていたと推定される。いうまでもなく丘陵南端に位置する日上天王山古墳が最初に築造されたが、以後歴代にわたってこれら小墳の築造が続けられたかどうかは証明されていない。

他の群在する小墳から離れて北端のかすかな高みに築造された犬山1号墳は、一部に葺石の根石の並びが残り、埋葬施設として竪穴式石槨と箱式石棺が天王山古墳後円部のようにT字形をなしてみられた。その点では日上天王山古墳と似ているが、墳丘は14.5m×17mの方形小形墳で、石槨は加茂の川原で採取したとみられる円錐で構築され、また副葬品や土器類も知らないなど、日上天王山古墳との直接の関係を辿ることは困難である。犬山80号墳は1967年の調査時墳丘はすでに削平され周溝だけが残っていた墳長約31mの前方後円墳で、円筒形埴輪、人形・馬形の埴輪や鏡片、土器類などが採集され、それらから前方後円墳時代後期前半の古墳と推定される。

ii. 天王山古墳は犬山古墳群の始祖か

群小の56基の古墳のほとんどは径約15mないし10m、とくに小さいものは7、8mの円墳で、それが一家族体を示す10群ほどに区分できそうな一氏族の共同墓地である可能性が高い。これまでたまたま知られた例や最近の35号墳の発掘成果によると、これらの少なくとも大部分は前方後円墳時代後期初頭(8期)を中心に前後する時期に築造されたものと考えられる。犬山80号前方後円墳はそのある時期の盟主であったと推定される。さらに推定を過らせば、北端の犬山1号墳は群小の古墳と日上天王山古墳とを少なくとも間接的につなぐ役割をもつものであったかもしれない。とすれば日上天王山古墳はおよそ200年を経過してなおこの地の人々によって集団の始祖の墓と信じられ意識されていたのかもしれないが、果たしてそうであるかどうかは今後の研究と調査の如何にかかっている。

(1997年2月12日記)

本文に登場する美作東部の古墳は、とくに注などで言及のない場合は『前方後円墳集成』中国・四国編(山川出版社 1991年)・近藤義郎編『月の輪古墳』(同刊行会 1960年・今井庵『原始社会から古代国家の成立へ』(『津市史』第一巻 津市役所 1972年)並びに本書とくに第4章澤田秀実および倉林眞砂斗の考察論文による。

註

- (1) 上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会 1961年
- (2) 中村一郎・笠野毅『大市墓の出土品』『書陵部紀要』27 1975年
- (3) 春成秀爾『土師器』『京都府山城町椿井大塚山古墳』山城町教育委員会 1986年
- (4) 錦木義昌『山陽における古墳の年代』『考古学ジャーナル』164 ニュー・サイエンス社 1979年
- (5) 丸山寛平『土師氏の基礎的研究—土師質陶棺の統轄者をめぐって—』『日本史論叢』2輯 1973年
- (6) 近藤義郎『大和の最古型式前方後円墳と宮山型特殊器台』『みずほ』16号 1995年

なお特殊器台型＝都月型埴輪・特殊壺型埴輪と二重口鋤轟との関係はなお明確ではないので、ここではふれない。

- (7) 高橋謙ほか「宮山墳墓群」『総社市史 考古資料編』総社市 1987年
- (8) 近藤義郎編『矢藤治山弥生墳丘墓』同発掘調査刊 1995年
- (9) もちろん宮山型特殊器台をもたない最古型式古墳の存在も否定できないが、今のところ証明が難しい。
- (10) 1期前半における有無はなお不明である。
- (11) 近藤義郎編『月の輪古墳』同刊行会 1960年
- (12) 植月守山古墳の存在が示すように、ある時期(4)圈が最有力であったことは否定できない。
- (13) 近藤義郎「日本における考古学的時代区分」「前方後円墳と弥生墳丘墓」青木書店 1995年
- (14) 河本 清「美作町植草寺山古墳出土の土器について」「古代吉備」10集 1988年
- (15) 今井 雅「吉備における古墳被葬者の検討－金蔵山古墳南石室と月の輪古墳造出し粘土都被葬者の検討－」「古代吉備」10集 1988年
- (16) 小郷利幸「津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告」「年報津山弥生の里」1号 津山弥生の里文化財センター 1994年
- (17) 岡本明郎「形象埴輪の性格」「埴輪の土質・形成・焼成についての検討」「月の輪古墳」「月の輪古墳」同刊行会 1960年
- (18) 「日上鈴山古墳群平成8年度調査現地説明会資料」津山市教育委員会 1996年

付 編 自然科学的分析

I. 出土土器の胎土分析

京都大学 清水芳裕

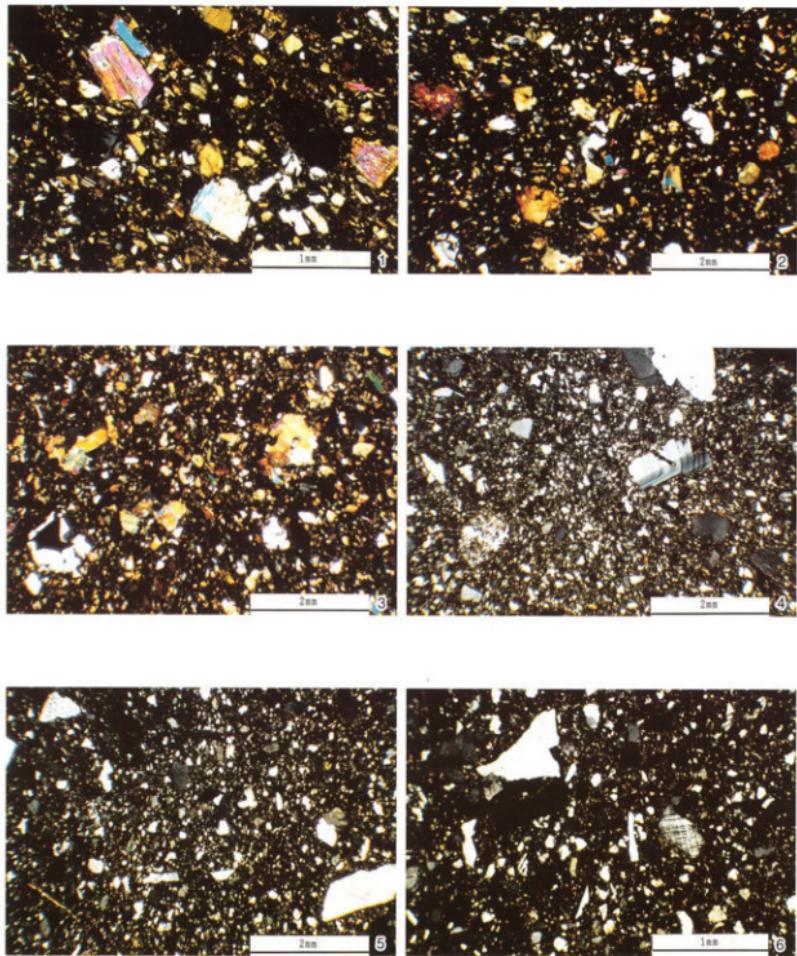
資料の特徴について、胎土の全体的な組成および含まれる岩石鉱物の種類やその性質について調査するために、個々の土器片からプレパラートを作成し、偏光顕微鏡によってその組成を分析した結果を報告する。分析資料は表1のとおりである。

表 1

資料番号	出土位置	土器整理番号	備 考
No. 1	東くびれ部	2 9	二重口縁壺胴部片
No. 2	第2トレンチ	3 6	弥生土器壺?
No. 3	第2トレンチ	4 1	弥生土器壺?

3点の土器の胎土全体の組成から区分すると、No.1とNo.2・No.3の間に大きな差がみられ、それは胎土中に加わっている岩石鉱物の種類とその含有量においてまったく異なった組成をもっているという点である。No.2・No.3に含まれる岩石鉱物は、石英およびカリ長石や斜長石などの長石類を主として、わずかに角閃石と輝石などの有色鉱物が加わり、また少量の変成岩がみられるという点において共通性がみられる。これに対してNo.1の土器に加わる岩石鉱物は、大部分が角閃石でありその含有量の全体に対する比率は、No.2・No.3における石英長石類に匹敵するものである。さらにこのほかに岩片として、この角閃石の構成比率の高い閃綠岩に属するような深成岩も多数みられる。このことはこの土器に含まれる多くの角閃石は、2次堆積によって多量に集積したそれを含む粘土層によるものではなく、供給源となる母岩に近い場所で意識的に採取されたことを推測させるものである。

この地域の地質条件を考慮すれば、胎土の岩石鉱物に一般的な組成は、No.2・No.3のような、有色鉱物が少量しか含まれない石英・長石類を主としたものである。したがって、No.1の土器については、他地域からもたらされたものか、意識的にこの種の材料を選択したと考えなければならない。前者の場合でも、角閃石は深成岩の分布する地域に特殊なものではなく、とくに遠距離の地域を想定する必要はないが、この土器の角閃石の含有率の上からみて意識的な材料の選択があったとみなさなければならない。後者の場合、当遺跡付近での程度採取可能か不明な点が残るが、津山市上原遺跡の特殊器台の6点についておこなった同様の分析結果でも、このNo.1の土器の組成と全く同質の胎土組成であったことなどを考慮すれば（清水芳裕 1992年 pp171-177 「植築弥生墳丘墓出土の特殊壺・特殊器台等の胎土分析」『植築弥生墳丘墓の研究』）、津山市一帯にこのような材料を採取可能な場所がいくつもあり、ある種の土器については意図的に選択して製作したものである可能性が強い。したがって、前者のように他の地域からもたらされたものと想定するよりも、後者のような材料の選択の結果が強く作用していると考えた方がよいと思う。



第49図 出土土器の胎土顕微鏡写真

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 資料No.1 (有色のものが角閃石) | 2. 資料No.1 (有色のものが角閃石) |
| 3. 資料No.1 (有色のものが角閃石) | 4. 資料No.2 |
| 5. 資料No.3 (大部分が石英) | 6. 資料No.3 |

II. 日上天王山古墳出土捩文鏡の鉛同位体比について

作陽短期大学 馬淵久夫*

東京国立文化財研究所 平尾良光

榎本淳子

1. はじめに

青銅器の原料产地を推定するための手段として、近年クローズアップされているものに鉛同位体比法がある^{1,2)}。鉛は質量の異なる4種の同位体²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床の性格と生成年代によって異なるので、产地の指標になり得る。筆者は、1970年代後半からこの手法の応用に取り組み、弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器について、時代によって青銅原料の出所が朝鮮半島、中国、日本と変っていくことを明かにした^{3,4)}。

今回、日上天王山古墳出土の捩文鏡について鉛同位体比を測定したので、その結果を報告する。

2. 測定

現在、同位体比を測定する機器である質量分析計は極めて高感度になっているので、本法はほとんど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている銘の微量を採取すればよい。同位体比は化学反応の過程ではほとんど変わることがないので、銘の中の鉛を使って測定すればよい。

筆者らは、測定用の試料を無益に大量採取することがないよう、一定の基準を設けて試料収集の目安としている。実験の条件は下記の通りである。

- a. 試料の量：銘 約1 mg
- b. 化学分離：電着法
- c. 質量分析計（固体用表面電離型、東京国立文化財研究所に設置）
：VG Isotope社（英国）製 VG Sector
- d. 鉛装着量：0. 2 μg

3. 測定結果

鉛同位体比の測定値(3種の独立の比)を表に示す。表には比較のため、筆者らが過去に測定した捩文鏡のデータも示した。

No.	鏡式	古墳名	年 代	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
1	捩文鏡	岡山県日上天王山	古墳前期	18.330	0.8541	2.1103
2	捩文鏡	伝群馬県長瀬西	古墳中期	18.080	0.8627	2.1290
3	捩文鏡	山形県お花山1号	古墳後期	18.254	0.8583	2.1255

4. 考察

(i) 日本出土青銅器の鉛同位体比グルーピング

第50図は、日本出土の青銅器の鉛同位体比が分布する範囲を示した総括図である。 $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ を縦軸に、 $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ を横軸にプロットする。この図には ^{204}Pb の関与する比が入らないが、鉛が日本産かどうかを議論する必要があるときだけ ^{204}Pb を含む比を援用することにしている。従って、特に断らない限り、古墳中期以前の青銅遺物の鉛は大陸産であることが検証済みと考えて頂きたい。このような前提で第50図のグルーピングの意味を説明する。

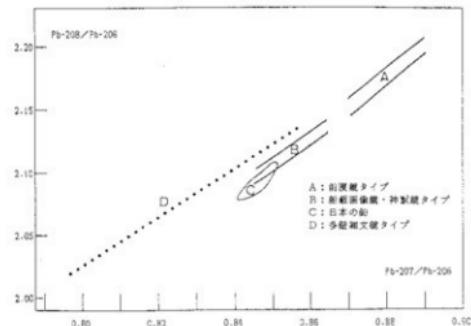
まず、舶載品から述べると、Aの範囲は弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置である。Bは神獸鏡（三角縁神獸鏡を除く）、画像鏡など後漢中期から三国・晋の時代に作られた鏡の占める範囲である。方格規則鏡、連弧文鏡（内行花文鏡）、細線式獸帶鏡のように後漢の早い時期から作られていた鏡は、AとBとに分かれる。Cは日本産の鉛鉱石の大部分が入る領域である。Dは多鈕細文鏡、細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。

つぎに、国産青銅器について言うと、弥生時代では早い時期の鋼鏃・

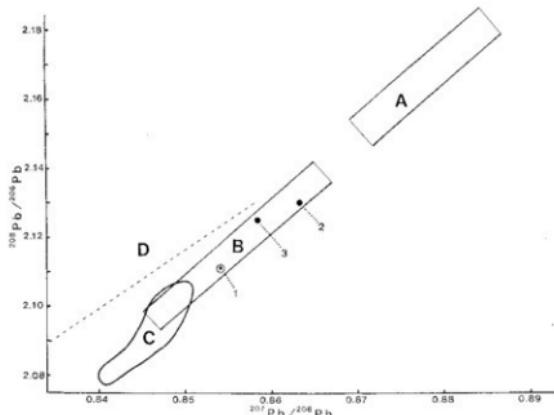
銅劍・銅矛などはラインDに載り、それより遅い時期の鋼鏃・銅劍・銅矛さらに小形彷製鏡・銅鋤などはAに入るという、はっきりした傾向がある。古墳から出土する彷製鏡・巴形銅器などの大部分はBに入る。国産青銅器がAに入るかBに入るかは、弥生時代か古墳時代かによって決定されるようみえる。日本産の鉛を含む銅器または青銅器は、現在のところ7世紀頃から現れることになっていく。

(ii) 捷文鏡の原料

今回測定した日上天王山古墳出土の捷文鏡（No.1）および過去に測定した2面の捷文鏡



第50図 日本出土青銅器の鉛同位体比分布



第51図 捷文鏡の鉛同位体比

- 1 日上天王山古墳出土
- 2 伝群馬県長瀬西古墳出土
- 3 山形県お花山1号墳出土

(No.2、No.3)を第50図にプロットすると第51図のようになる(領域Bを中心にして拡大してある)。第51図で明かなように、3面の捩文鏡はすべて領域Bに入り、「古墳から出土する彷製鏡・巴形銅器などの大部分はBに入る」という従来の一般則に一致している。

前漢鏡タイプの鉛が中国北部の産であるのに対し、領域Bの鉛は、中国の中部から南部にかけてのもので、しかもいくつかの違う地域の鉛が重複している可能性がある。従って、産地といつても○○省というように特定の地域を指すことはできない。ただ、弥生時代末または古墳時代初頭から日本列島に入り始めた中国産の新しい原料(製品の形も含めて)がB領域に入るものであることは確かである。

樋口隆康によると、捩文鏡は4世紀末から5世紀代に集中し、比較的短期間で終ったという。表に示したように、No.1が前期古墳から出土したのに対し、No.2の捩文鏡は中期の古墳から、No.3は後期の古墳からと、偶然にも前期・中期・後期にまたがって出土している。これはNo.2が関東、No.3が東北と、鏡作りの中心から離れた地域から出土していることによるのかもしれない。鉛同位体比は相互に違っているが、これら3面の鏡は同じような材料で製作されたと考えられる。

測定試料についてお世話になった近藤義郎先生に厚くお礼申し上げたい。

(馬瀬久夫)

引用文献

- 1) 馬瀬久夫、富永健編 1981 『考古学のための化学10章』 東京大学出版会
- 2) 馬瀬久夫、富永健編 1986 『統考古学のための化学10章』 東京大学出版会
- 3) 馬瀬久夫、平尾良光 1982 「鉛同位体比による漢式鏡の研究」 MUSEUM 370号
- 4) 馬瀬久夫、平尾良光 1982 「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」 考古学雑誌 第68巻1号
- 5) 馬瀬久夫、平尾良光 1982 「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」 考古学と自然科学15号
- 6) 馬瀬久夫、平尾良光 1983 「鉛同位体比による漢式鏡の研究(2)」 MUSEUM 382号
- 7) 馬瀬久夫、江本義理 1983 「鉛同位体比による太安萬侖墓誌銅板および武藏国分寺付
ほか 近出土銅造仏の原料产地推定」 古文化財の科学 28号
- 8) 馬瀬久夫、平尾良光 1987 「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」 考古学雑誌 第73巻2号
- 9) 樋口隆康 1979 『古鏡』 p.335~356 新潮社

* 平成9年4月から、くらしき作陽大学食物文化学部教授に就任予定。

Ⅲ. 日上天王山古墳の探査結果

奈良国立文化財研究所 西村 康

はじめに

本古墳における探査の目的は、後円部墳頂において主体部を探ることにあった。古式古墳である本対象では、主体部は深い位置にあると推定されるので、電気探査を採用することにした。この方法によれば、電極間隔を広げることにより、目的とする探査深度を選択できるからである。また、遺跡探査に応用される他の物理探査の方法である地中レーダー探査や磁気探査では、ここで予測されるような粘土質の土質では、2 m以上の深い層位の探査での有効な成果が、期待できないからである。

ここでは、測定対象とした後円部墳頂部の面積が狭いため、通常、電気探査による測定で用いる4電極のすべてを十分に展開することは困難とみられ、探れる深さ面積ともに制限されるので、2極法による測定を採用することにした。2極法では測定に移動させる電極が2であるところから、設定した範囲の隅々まで測定することが可能である。

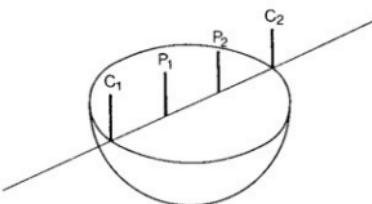
測定の方法

初めに述べたように、ここでの探査は電気探査の2極法によることにした。後円部墳頂において設定した測定範囲は南北10 m、東西11 mである。測定はこの範囲を1 m間隔の格子点で、すなわちタテ、ヨコともに1 m間隔でおこなった。各点における電気比抵抗を求め、その平面分布の状況を知る探査により、遺構の平面形や規模、方向を特定することを目的としたものである。もし、主体部が石で構成されておれば、そこのみは周囲と比較すると高い比抵抗を示す箇所として捉えられ、その規模や形態も明らかにできると考えたのである。

測定区内を移動させた電極の間隔は2 mと4 mである。探った深さとしてはそれぞれの間隔を直径とした半円球状の領域（第52図）となるが、土壤情報としてはその距離すなわち深さの半分程度の性質を、最も反映するものといわれている。した

がって、本古墳ではそれぞれ1 mと2 m程度の見かけの深さを探り、それぞれの深さにおける電気抵抗の平面分布を求めることになる。しかし、実際にはより浅い層位や深い部分の土壤情報も含んでいるはずである。

使用した測定装置は英国 Geoscan Research社製RM15型で、移動電極の2 m、4 m間隔とともに100 Volt、10 mAの出力とした。遠電極は約150 m離れた位置に設置した。なお、各測定点における電極移動は、手作業によつた。



第52図 電気探査で測定している領域模式図
(ウェンナー法の場合)

測定の結果

結果は電極間隔 2 m と 4 m それぞれにおける、見かけ比抵抗の平面分布としてコンター図で表す。表示の数値は $\text{ohm} \cdot \text{m}$ である。相対的に比抵抗の高い部分を実線で、低いものは点線で区別して、10 $\text{ohm} \cdot \text{m}$ 每に太線を入れている。外郭線上の一日盛りは 1 m である。

〈電極間隔 2 m〉 測定した範囲のはば中央に 600 $\text{ohm} \cdot \text{m}$ くらいを境として、完結する比抵抗の高い範囲がある（第53図）。石の存在を示すものと考えられる。高い部分から低い方への変化は漸移的であり、それの限界は明かでないが、南北 5 ~ 6 m で東西幅は 3 m 弱程度の広がりにあるらしい。

そして、石は 1 m よりも深い位置にあるものと思われる。このように推定するのは、ここでは検土杖を用いた探索がなされており、1 m 未満では石の存在が確認できないという結果に基づくものである。しかし、石は 1 m よりそれほど深くはなく、1.5 m より浅い位置から存在するものと考えられる。

〈電極間隔 4 m〉 この間隔でも、測定区の中央に比抵抗の高い完結する部分がある。しかし、その方向は 2 m の結果とは 90° 異なり東西方向にある。また、そこの部分の比抵抗も 100 $\text{ohm} \cdot \text{m}$ ほど低い。この程度の値であると、必ずしも石の存在を表しているとは言い切れない。花崗岩が風化した地山のような土壤でも、この程度の比抵抗を示す可能性がある。

また、電極間隔が 4 m であるので周囲の土壤を平均した情報を捉えており、もし石が存在していても、それを僅かに含む程度にとどまると理解できる。つまり、石は余り深い層位まで存在していない可能性がある。この間隔の測定では石室の存在状況を捉えてはおらず、より深い層位を反映していると考えられるのである。

したがって、石からなる構造物は 3 m よりも深い層位に達している可能性は少なく、1 m 強の深さから 2.5 m 程度の間にあるものと思われる。2 m の結果と 90° 方位が異なるように捉えたのは、集積した石の下面付近の不均質な状態か、掘り込んだ地山の変化の様子を反映したためと推定できる。しかしながら、可能性は小さいが、もしかすると西南へ延びる暗渠排水の施設があるのかもしれないということや、あるいは、石室の下部に何らかの施設が構築されているのかもしれない点も、推定の中に考慮した方がよいと考えた。

なお、石室を構成するらしい石も、多分、多数が集積した状態ではなく、木棺直葬の上面のみを石によって覆ったか、側面に石があってもそれは板石を立てた箱式棺様のような遺構である可能性も、考えられるというように推定した。

上に述べたように、ここでの測定で注目されるのは、2 m と 4 m の結果が大きく異なることであった。しかし、石造からなる主体部とすると、2 m の結果の方がより実際の遺構を反映している可能性が大きいと考えられる。

電気探査では、経験的にいえば上層に比抵抗の高い物質がある場合には、その影響が下部にも及び、全体として比抵抗が高い構造として現れるのが普通である。しかし、ここにおける下層を探査した電極間隔 4 m の測定で、比抵抗が低いという結果を得たのは、主体部を構成する石の厚みは薄く、石のボリュームとしてはあまり大規模ではない可能性があると考えた。

しかしながら、測定で採用したのは電極間隔 2 m と 4 m であり、地下情報としては十分ではない。これに 1 m とか 3 m の間隔を追加すべきであったと反省しているところである。

おわりに

以上に述べた探査結果の理解は、発掘調査の実施される以前におこなったものである。以下では、発掘調査の結果に基づいて若干の整理をしておきたい。

発掘調査結果によれば、ここでは2基の石櫓と2基の箱式棺の合計4基の遺構が検出されている。また、これらのそれぞれは、遺存する深さに違いがあることも確認されている。この深さの違いは、探査結果を検討する際に注意する必要がある。

探査から推定した遺構の存在状態を発掘調査の結果と照合すると、電極間隔2mで捉えた南北方向の構造は中心にある第1石櫓にあたっており、電極間隔4mでみた比抵抗の高い箇所は第2石櫓に該当しているように見える。ところが、検出された遺構の実際をみると、方向と深さがまったく異なる。

すなわち、電極間隔2mの結果で中心主体とみた石櫓は、4mの間隔で推定した構造よりも深い位置にあり、また、第1、第2石櫓の方向は90°違う。発掘調査によって知られるそれぞれの遺構は、浅い位置に東西方向の第2石櫓と箱式棺があり、深い位置に中心主体である第1石櫓があるのである。

この結果に基づいて改めて検討すると、2mの電極間隔における比抵抗の高い範囲は、南北方向に7mを越え、東西方向には5m近い範囲として見ることが可能である。これによれば、深い位置にある第2石櫓とそれに近接する石造の箱式棺のすべてを含めた比抵抗の異常を示しているようである。すなわち、個々の遺構の詳細は区分できていないのである。

4mの結果では、比抵抗の高い箇所は測定区の中央より西南に寄っており範囲も狭い。これは、上層にある第2石櫓と箱式棺の影響を受けた結果と推定できる。先にも述べたように、電気探査では、経験的にいえば上層に比抵抗の高い物質がある場合には、その影響が下部にも及ぶことがある。

これらを総合すると、ここにおける電気探査では、石から構成される対象を捉えることはできているが、それぞれの構造は明瞭に提示できておらず、箱式棺にみたように個々の遺構の区分においても十分ではなかったといえる。このことは、電気探査における有効性と限界を示すものと理解できる。電極間隔2mと4mにおける測定では、深さ方向と平面位置の分解能は、この程度ということである。

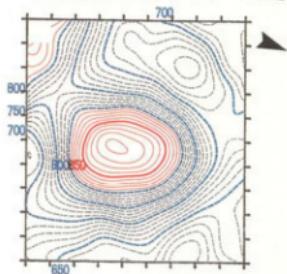
電気探査では測定をする電極間隔を選択することにより、深い層位までの土壤情報を得ることが可能であるが、深い層位を目的とするほど電極の間隔を広くとる必要があり、その結果広い範囲の三次元的土の情報を含むことになる。

しかしながら、ここで見るよう石造の構造物が比抵抗の高いものとして、しかも層位が異なる位置にあるという形で捉えられたにも関わらず、遺構の存在の実際が違うという結果は不審である。強いて考えると、電気探査では広い範囲における三次元的土壤を平均した情報を示すため、たとえ石が集積した状態にあっても、測定によっては実際を反映しない可能性があるということであろう。

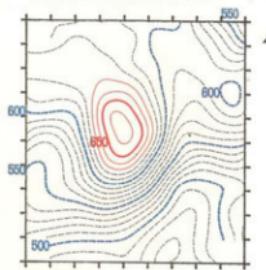
なお、この結果は本遺跡における特殊な例であり、遺跡における電気探査の一般的な状況ではないことを強調しておきたい。

(付記) 本遺跡における探査に際しては、立命館大学学生の垣根美奈、村松佳幸(4回生=当時)、吹田直子、吉田高穂(3回生=当時)諸氏の援助を受けた。記して感謝する次第である。

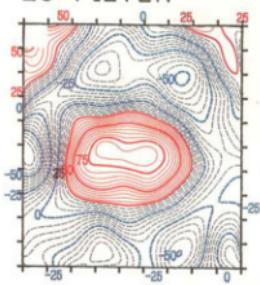
TENNOUYAMA TWIN20



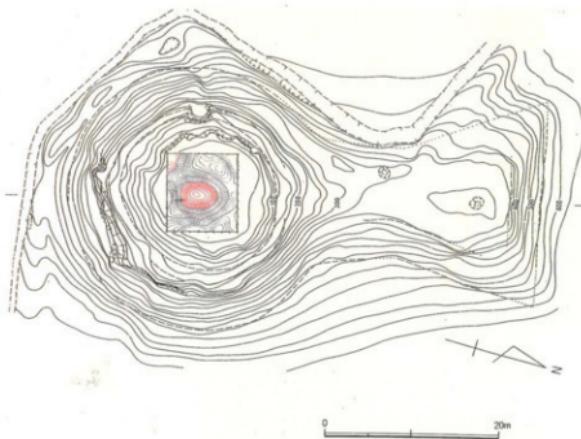
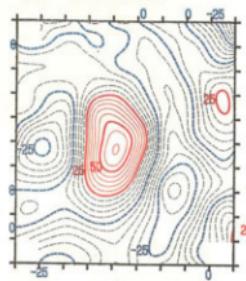
TENNOUYAMA TWIN40



20 FILTER



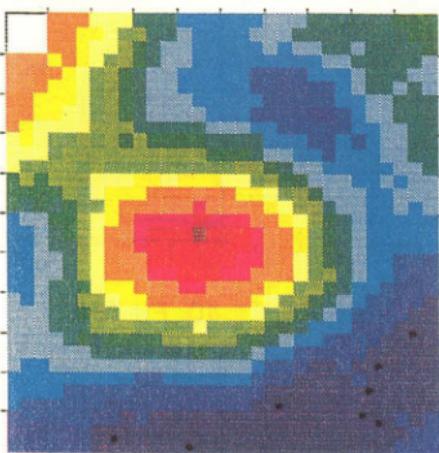
40 FILTER



第53図 電気探査結果（1）

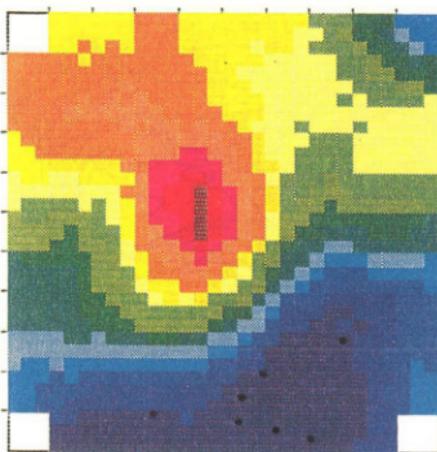
日上天王山古墳

電気探査結果 2極法（移動電極間隔 2 m）



日上天王山古墳

電気探査結果 2極法（移動電極間隔 4 m）



第54図 電気探査結果（2）

HIKAMI-TENNŌYAMA KOFUN,
THE EARLIEST TYPE ZENPŌ-KŌEN FUN,
IN MIMASAKA OF
OKAYAMA PREF., JAPAN

editors

Kondō Yoshiro

professor emeritus of Okayama University

Kurabayashi Masato

lecturer of Jōsai International University

Sawada Hidemi

research assistant of Tokyo Municipal University

1997

BOARD OF EDUCATION, TSUYAMA CITY
Hikami-Tennōyama Kofun, the Earliest Type Zenpō-kōen Fun
in Mimasaka of Okayama Prefecture, Japan

A Summary

1. Situation and the system of the excavation

This is a report on the excavation of Hikami-Tennōyama Kofun, the earliest type Zenpō-kōen Fun in the eastern suburbs of the city of Tsuyama, in the northern and mountainous area of Okayama Prefecture which has been called Mimasaka since 8th century A.D. The kofun was built on the top of the low hill called Une-yama, having a wide and excellent view of the valley of the river Yoshii.

The excavation was promoted by the Board of Education of Tsuyama City and the participants were composed of research fellows, graduate students and students of several universities, staffs of the Research Center of Cultural Properties of Tsuyama City and volunteers inside and outside of the city. It began on 13th of March ,1994 and ended on 15th of May of the same year.

2. Features

The purpose of the excavation was to clarify the features of the earliest type Zenpō-kōen Fun in the Mimasaka area. Firstly we tried to survey the shape and the scale of the mound, and found that the total length is 56.9 meters, the diameter of the rear mound is 32.4 meters, the height 6.4 meters, and the length of the front part is 24.5 meters, the height 3.0 meters. To be important we found the sides of the front part are widened with a slight curve as a kind of plectrum of traditional musical instruments of Japan. It is a feature of the early type of the front part of Zenpō-kōen Fun.

Still we found the covering gravel on all the slope of the mound, and fragments of a pot on lower surface at the boundary between the rear mound and front part, which are a so-called double necked pot and belong to early phase of Zenpō-kōen Fun period.

Secondly we digged widely the central part on the top of the rear mound and found two pit-style stone chambers and two stone cists. The main chamber is located in the center, built deep in the ground and paralleled to the main line of the mound. The location of another chamber and two cists are at right angle with the main line of the mound and shallow near the surface. The inner length of the main chamber is 4.21 meters and smaller chamber 3.10 meters. The floors on which coffins were put are flat and indicate box-type long coffins. The main chamber had been already

robbed out and a few iron tools remained. Another chamber retained a bronze mirror, an iron sword, two iron arrowheads and fragments of an iron tool.

3. Discussion

i. Recently Zenpō-kōen Fun period (approximately from the later phase of 3rd century to the end of 6th A.D.) is divided into ten stages. Judging from the style of the mound, the type of the pot, features of stone chambers and the assemblage of the funeral goods, the Kofun is thought to have been built in the later phase of the first stage or in the beginning of the second stage of Zenpō-kōen Fun period. In those days Mimasaka had been divided into about ten tribal and political territories, each chieftain of which built Zenpō-kōen Fun, or Zenpō-kōhō Fun (the rear mound is square too) or a big round barrow for his burial.

ii. Besides two stone chambers and two cists on the top of the mound, two other cists were found at the foot of the rear mound, which must have been subordinates. These tell us that the person buried in the main chamber was probably a local chieftain who was in some relationship with the great chieftain of Yamato tribal union and also possibly with the chieftain of the southern part of Okayama Pref., more fertile area called Bizen in 8th century. Probably the close connexion of the chieftain of Hikami-Tennōyama Kofun with the some more powerful chieftains in the South would have been held by ship-transports through the river Yoshii. The person buried in another stone chamber might have been the wife who died some later. Tow buried together in one cist would be possibly infants or babies. Another cist has been already half broken. Though these three seem to have had no funeral goods, they must have belonged to the chieftain family, because they were buried on the top of the rear mound, different from the cists buried at the foot of the mound.

Thus we achieved our object to clarify the aspects of a typical Zenpō-kōen Fun of the early phase in Mimasaka. We are in deep gratitude to all of the participants of the excavation for their assistance.

(summarized by Kondō Yoshirō and Kurabayashi Masato. 22 nd March 1997)

写 真 図 版



日上天王山古墳付近の空中写真

昭和22年5月10日米極東空軍撮影の空中写真を、国土地理院の承認を得て転載
縮尺約59,000分の1

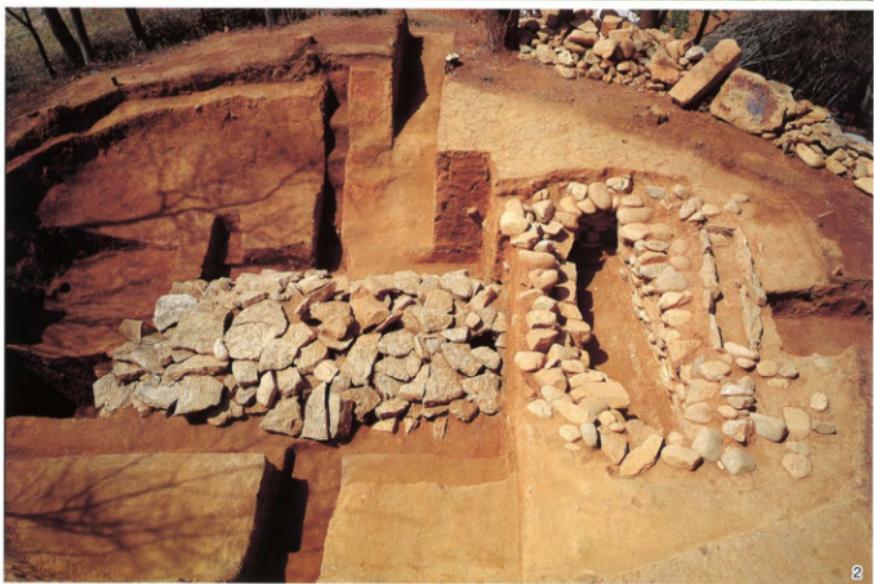


1



2

1. 日上歛山丘陵（南から）
2. 墳丘側面（南西から）



1. 上空から見た埋葬施設

2. 斜め上方から見た埋葬施設（左から中心石櫛、第2石櫛、第1箱形石棺） 寿福滋 撮影



1. 塗丘調査前（前方部から）

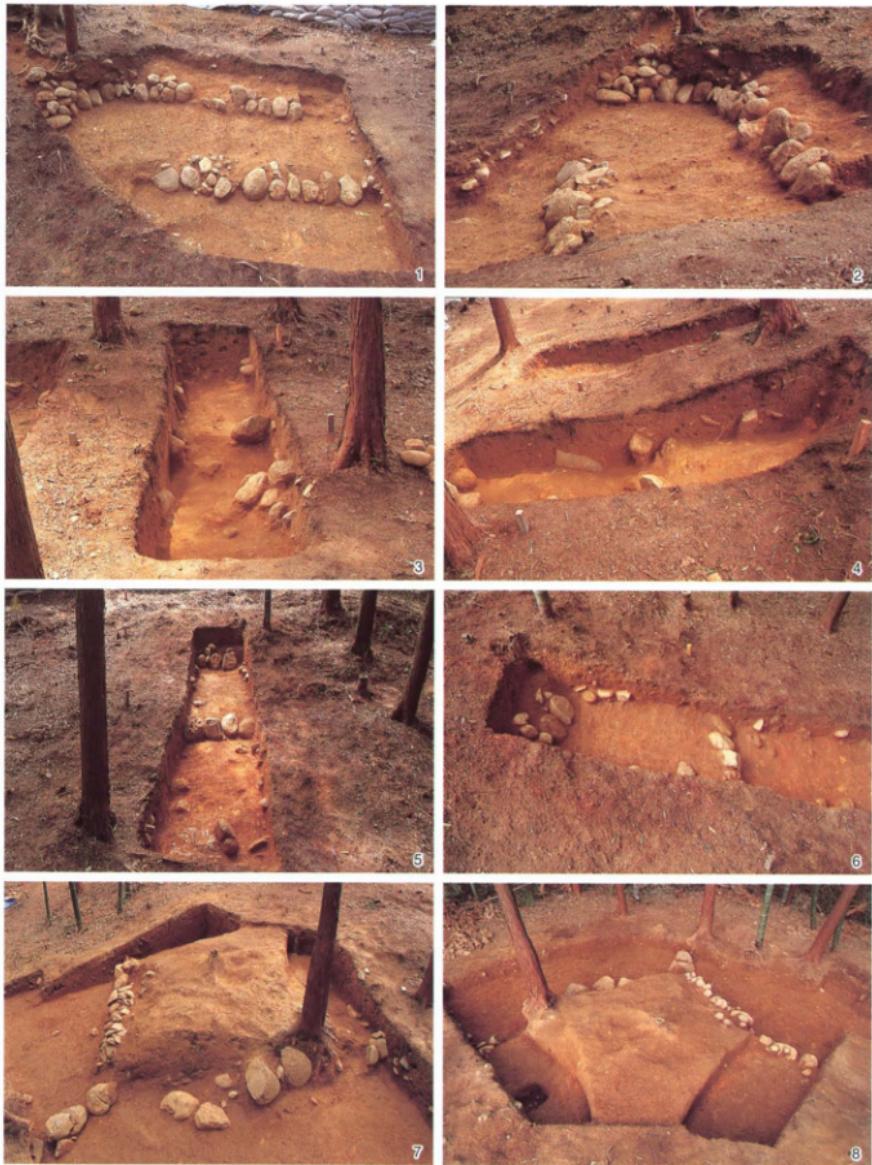
4. 西側くびれ部

2. 塗丘調査前（後内部から）

5. 南北トレンチ南端

3. 東側くびれ部

6. 東西トレンチ（東側斜面）



1. 第1トレンチ（東から）

4. 第2トレンチ土層断面（北から）

7. 第4トレンチ（北から）

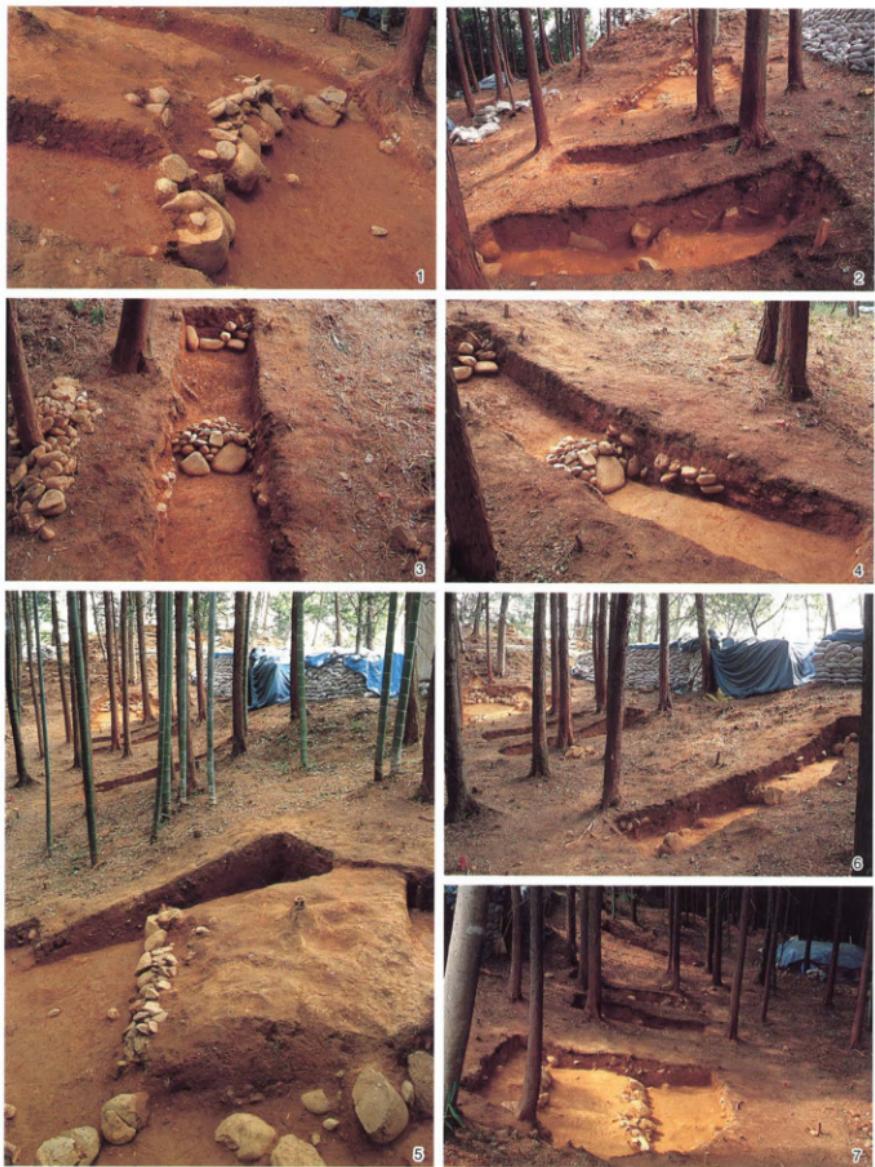
2. 第1トレンチ（北から）

5. 第3トレンチ（東から）

8. 第4トレンチ（南西から）

3. 第2トレンチ（東から）

6. 第3トレンチ（南から）



1. 第4トレンチ前方部側縁（南から）

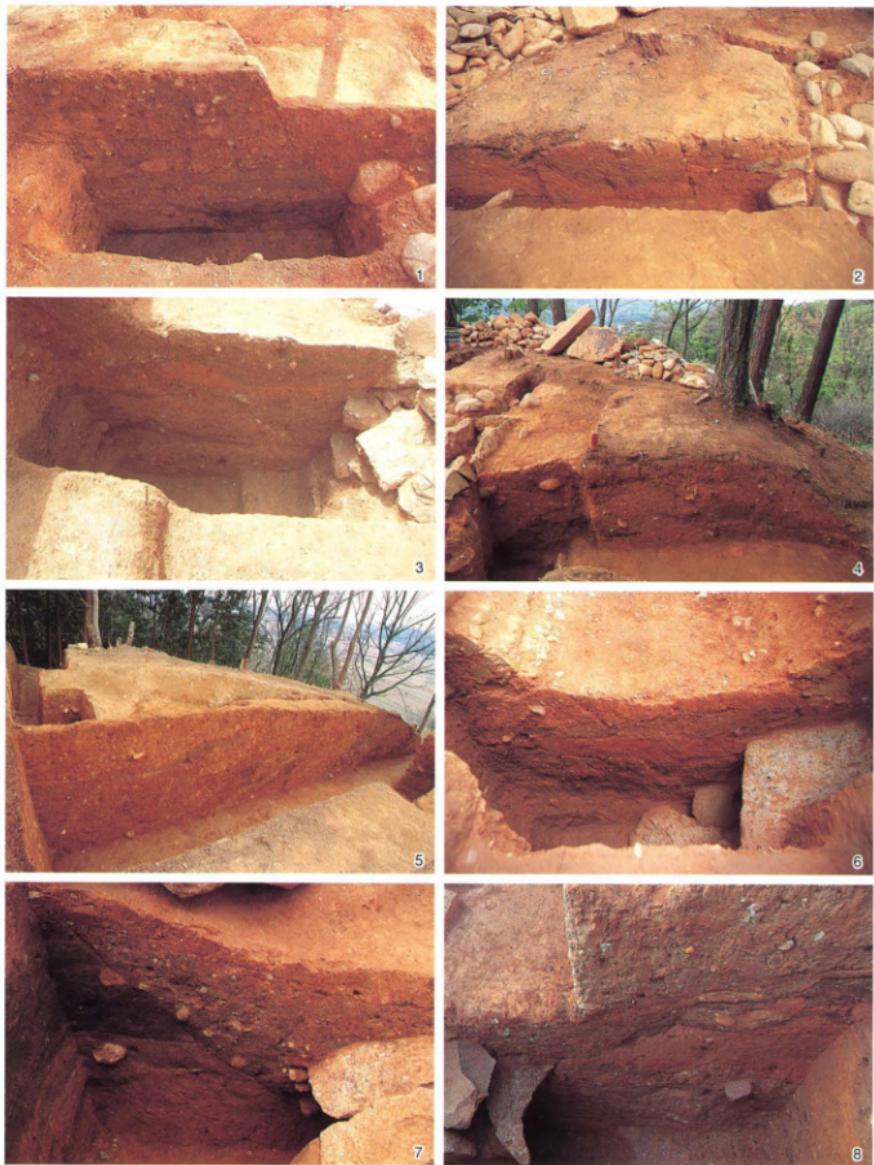
3. 第5トレンチ（北から）

6. 前方部東側縁（北東から）

2. 前方部東側縁（北から）

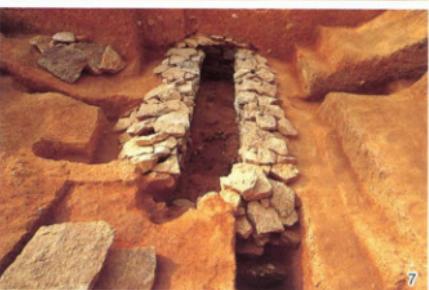
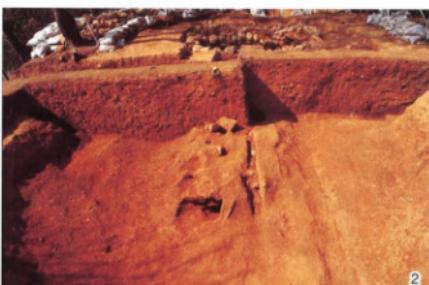
4. 第5トレンチ土層断面（北東から）

7. 前方部東側縁（くびれ部から）



1. Cサブトレンチ南壁（第2石槨墓坑東端）
 3. 南北トレンチ西壁（中心石槨南端）
 5. 南北トレンチ南半部東壁
 7. 東西トレンチ北壁（中心石槨西端）

2. Aサブトレンチ北壁
 4. 南北トレンチ北端西壁
 6. 中心石槨北端
 8. 東西トレンチ北壁（中心石槨東端）



1. 調査前の後内部埴頂平坦面

3. 中心石槨の被覆石検出状況（南から）

5. 中心石槨の床面検出状況（南から）

2. 中心石槨の黒褐色被覆土検出状況（南から）

4. 中心石槨の蓋石検出状況（東から）

6. 中心石槨（東から）

7. 中心石槨（南から）



1. 中心石櫛の捲乱状況

4. 中心石櫛（西から）

7. 中心石櫛の床面断ち割り状況（南から）

2. 中心石櫛北側小口

5. 中心石櫛床面南端

3. 中心石櫛南側小口

6. 中心石櫛床面の捲乱坑（北から）



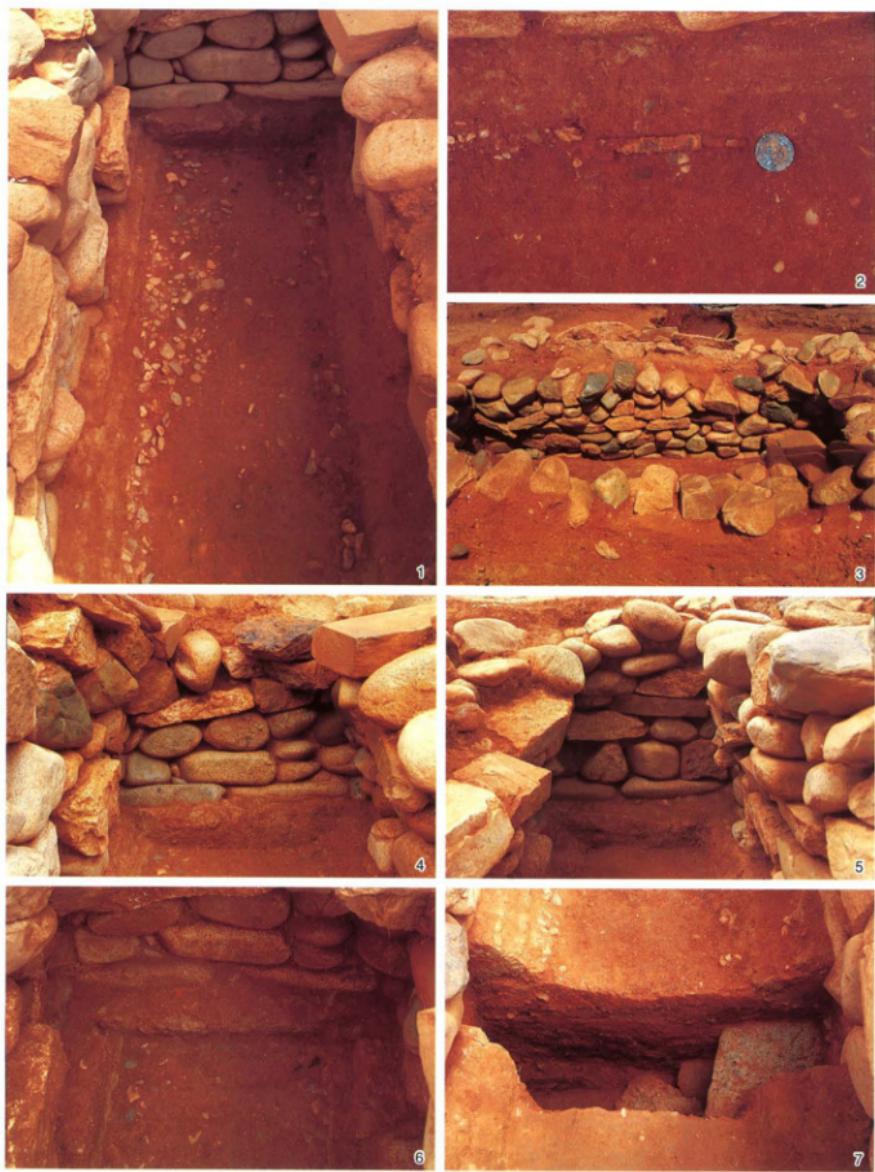
1. 第2石槨の被覆石検出状況（東から）

3. 第2石槨の蓋石検出状況（東から）

5. 第2石槨の遺物出土状況（西から）

2. 第2石槨及び第1箱形石棺の蓋石検出状況（東から）

4. 第2石槨の崩落状況（東から）



1. 第2石櫛の床面検出状況（西から）
3. 第2石櫛北壁（南から）
5. 第2石櫛西側小口
7. 第2石櫛の床面断ち割り状況（西から）

2. 第2石櫛の遺物出土状況（南から）
4. 第2石櫛東側小口
6. 第2石櫛東側小口付近の木棺痕跡検出状況（西から）



1. 第1箱形石棺の蓋石検出状況（東から）

3. 第1箱形石棺の床面検出状況（東から）

5. 第1箱形石棺西側小口

7. 後円部上の埋葬施設（東から）

2. 第1箱形石棺の床面検出状況（北から）

4. 第1箱形石棺東側小口

6. 第2箱形石棺（東から）



1



2



3



4



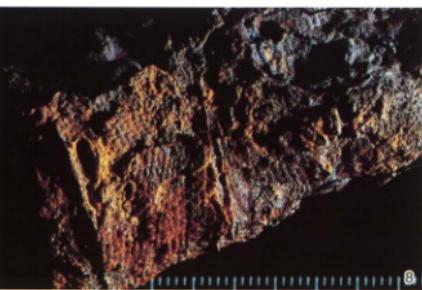
5



6



7



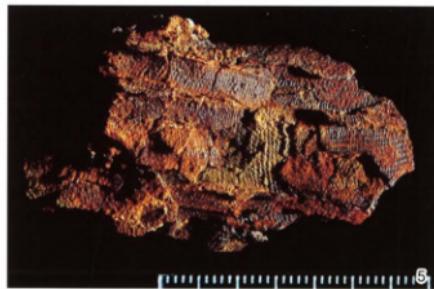
8

中心石槨副葬品

1. 直刀片 (第33図-1、2)
4. 銚 (第33図-10、12~14)
7. 直刀付着の布帛

2. 鉄鎌 (第33図-3~5)
5. 鉄斧・不明 (第33図-15、16)
8. 鉄斧付着の布帛

3. 鉄鎌・不明・刀子 (第33図-6~9、11)
6. 青銅片



第2石槨副葬品と埴丘出土土器

- | | | |
|----------------------|-----------------------|----------------|
| 1. 銅鏡 (第35図-1) | 2. 鉄鎌 (第35図-2～4) | 3. 鉄鑿 (第35図-5) |
| 4. 鉄劍 (第35図-6) | 5. 鉄鎌 (第35図-3) 付着の布帛 | 6. 鉄劍 付着の布帛 |
| 7. 二重口縁壺形土器 (第36図-1) | 8. 弥生土器 (第36図-8) 蓋形土器 | |

報告書抄録

ふりがな	ひかみてんのうやまこふん						
書名	日上天王山古墳						
副書名							
巻次							
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第60集						
編著者名	近藤義郎、倉林慎砂斗、澤田秀実						
編集機関	日上天王山古墳発掘調査委員会						
所在地	〒708 津山県津山市山北520 津山市教育委員会内 TEL 0868-24-8413 FAX 0868-24-8414						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ひかみてんのうやまこふん 日上天王山古墳	岡山県津山市 ひかみ 日上417-13	33203		35° 02' 47"	134° 02' 06" ~1994.3.13 ~1994.5.15	177m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
日上天王山古墳	前方後円墳	古墳時代	竪穴式石槨 2 箱形石棺 2	振文鏡、鉄剣、铁刀 鐵斧、鐵鎌、土師器			

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集

日上天王山古墳

平成9年3月31日発行

編集 日上天王山古墳発掘調査委員会

同調査団 団長 近藤義郎

発行 津山市教育委員会◎

岡山県津山市山北520番地

印刷 有限会社 美成

岡山県津山市平福177番地の2